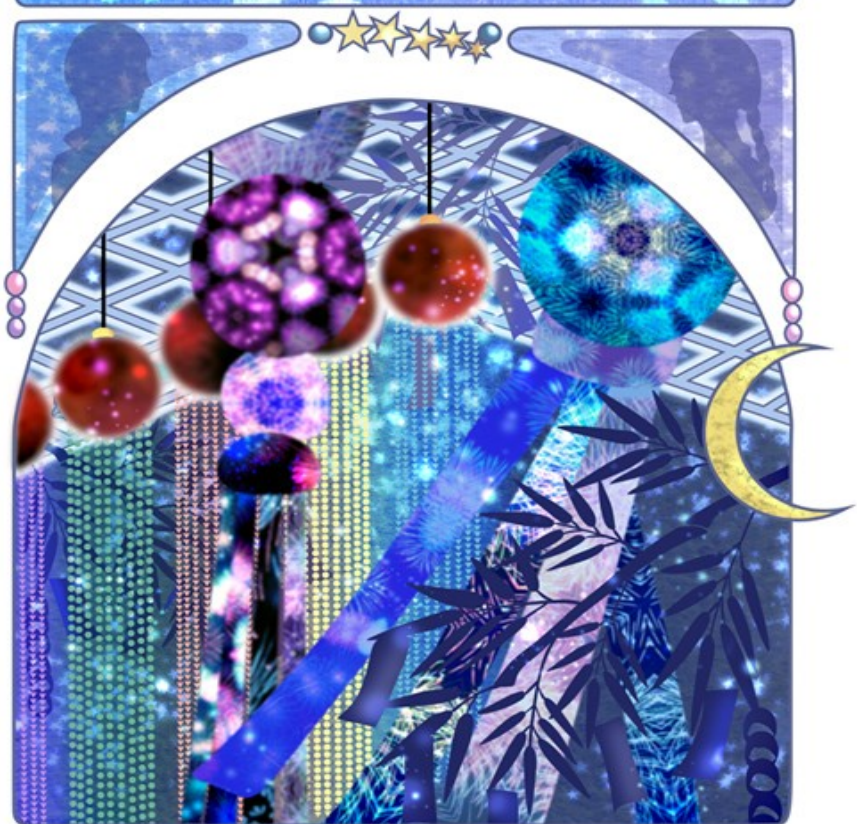


イエスタデイ短冊モア



作

みかん (奇数章)

ゆうき (偶数章)

表紙イラスト

みかん

絶対に書きたくない。書いてやるものか。あさみはそう決めた。今日の帰りの会でのことだ。

「来週は七夕があるので、みんなには短冊に願い事を書いてもらいます」担任の百田先生は、教室をぐるりと見渡しながらそう言った。

「来週までに考えておいてくださいね」

クラスメイトたちは席の近い者同士で、願い事を何にするか、早速あちこちでおしゃべりを始めたけれど、あさみは参加する気にはなれなかった。別に、願い事なんてなかったからだ。

サッカー選手になれますように。メジャーリーガーになれますように。ケーキ屋さんとお花屋さんになれますように。……なれるわけないって。現実は厳しいんだから。

こうむいんになれますように。……これは、その子の親の願い事でしょ。

お金持ちになれますように。……こんなの、夢がない。

有名人になれますように。星野まりんちゃんみたいに美人になれますように。……なれないよ、せめて芸人にしとけば。

犬を飼ってもらえますように。タイガークレストを買ってもらえますように。……いつから七夕はクリスマスになったんだろう。

家内あん全。無病息さい。家族みんなが健康で暮らせますように。……神社の絵馬にでも書いておけば。

こういう願い事はみんなダサイし、子どもっぽい。叶うわけもない夢が多すぎる。願い事なんて絶対書きたくない、とあさみは思う。

第一、みんなに見られてしまうのが恥ずかしい。願い事というのは、こっそりと胸の中に大切にしまっておくものなのに、どうして七夕ではそれをばらしちゃわないといけないんだろう。

だから、あさみは決心した。

帰り道、ゆきこと別れ、考えた。道路沿いのポプラの木は、大きな葉っぱをさわさわと鳴らしている。あれを実行するには、笹がいる。そのためには……。

「ただいま」

「おかえり、早かったわね」

「うん、今日は放課後遊ばないで帰ってきたの」

「そう、珍しいわね。いつもアスレチックで遊んで帰るんじゃないかな？ あ、手を洗いなさい」

「はあい」

ハンドソープのポンプを押す。ツープツシュだ。指の間を洗いながら、あさみは考える。

いつ、言おうか。さりげないほうがいい。

「ねえ、お母さん。もうすぐ七夕でしょ」

「あら、そういえばもうそんな時期ね。忘れてた」

陽子はカッターシャツにアイロンをかけている。アイロンのスチーム蒸気が暑苦しそうだ。

「去年ね、学校で大きな笹に短冊をみんなでつるしたんだ」

「へえ、クラス全員分なら大きい笹だったんでしょ。そういえば、お母さんが子どもの頃、やっぱり小学校でやったなあ」

「大きな笹だった？」

「そうね、クラス全員分の短冊がつるせるくらいにはね」

「へえ、お母さん、あのね、あさみね、笹が欲しいの」

思い切って一気に話したが、不自然じゃなかっただろうか。

「何よ、急に。笹なら、学校で用意してもらえらるんでしょう」

「それはそうんだけど、あのね、あさみだけの笹が欲しいの」

「何に使うの？」

あさみが恐れていた質問だ。やっぱりそれを言わなきゃいけないんだろうか。

「おうちでも七夕がやりたいんだ」

「でも、笹なんてこのへんには……」

あとは簡単だった。あさみの祖母である綾子の家の庭に笹があるのだ。綾子の家は、ここから少し奥、電車で一駅ぶんの山里の町にある。今日は四時間目で学校が終わったから、十分行つて帰れるはずだ。

『萩の月』、ちゃんと渡すのよ」

「分かってるってば」

「五時半までには帰ってくるのよ」

「はあい」

「車に気をつけてね」

自分の親はよそと比べて、心配しすぎだ。あさみは友達の家に行くたびにそう思った。この電車だつて、三年生になって初めて一人で乗った。友達はもつと早くから乗つて、となり町のショッピングモールに行つていたのに。

あさみは、そんなことを考えながら、電車の窓の外を眺めた。電車からは、線路沿いの竹やぶが見える。風に揺れて、しなやかにゆれている。この竹やぶ沿いのカーブを電車は曲がつて、トンネルに入る。このトンネルを出ると、景色は一変し、緑一面の田んぼや畑が広がる。となり町だ。この町は古くから、畜産や果樹栽培が盛んである。

綾子の家は駅から一本道だ。人がまばらな駅を抜け、シャッターの目立つ商店街を通るともう見えてくる。ガリガリした石なのか、コンクリートなのかよく分からない素材の壁に囲まれて、その中にこんもりした植木とたくさんの盆栽の鉢植えが見える。グレーの瓦

に白い壁の、古いけれど大きな家だ。

今日は教室がないから、おうちのほうのチャイムを鳴らすのよと、玄関先で陽子が念を押していたのをあさみは思い出す。精一杯、つま先立ちをして、あさみはチャイムを押し。ちりんるりん、と軽やかな音が鳴る。

しばらくして、玄関の引き戸が開いた。あさみの大好きな人の姿が見えた。

「まあ、あさちゃん、よく来たね」

綾子は門の扉を開けた。

「こんにちは。これ、おみやげ。『萩の月』だよ。チョコ味もあるんだ」

「まあまあ、ありがとう。おばあちゃん、このお菓子が大好きよ。さあさ、上がって」

家の中は、あさみの家のおいととは違った独特なおいがした。ひんやりした廊下が足の裏に心地いい。通された居間には、織物のタペストリーと一緒に、前にあさみが綾子に贈った千代紙で作った壁掛けが飾ってある。

「今日は、織物教室がない日だから、ちょうどよかったわ。それで、あさちゃんは何か用事があったて、おばあちゃんの家に来たんじゃないのかい」

きた、とあさみは思った。出された麦茶のコップを見つめながら答える。

「うん、えっとね、来週学校で七夕をやるの」

「そうかい、短冊に願い事を書いてつるすのかい」

「うん、クラス全員でやるみたい。でも、あさみは嫌なの」

「ふうん、それはまたどうしてなんだい」

「願い事を短冊に書いてクラスの笹につるすと、みんなが見ちゃうじゃない。あさみ、自分の願い事を誰にも見られたくないもん。だって、願い事って内緒にしておくものでしょ」

綾子はうんうんと頷いた。そして、麦茶を一口飲んで、考え込んでいるようだった。

「そうすると、あさみちゃんは願い事をこっそりしたいんだね」

「うん、そうなの。だから、おばあちゃんちにある笹を少しだけもらえないかなって思っ  
て」

「それはいいけど、笹をどうするの？」

「うんとね、家で七夕をやるの。家なら、ちゃんと本当の願い事を書けるから」

綾子はふたたび、何かを考えているようだった。ダメだって言われて笹を分けてもらえないかもしれない、あさみはドキドキした。麦茶のコップには水滴がたくさんついていて、あさみの内心を見透かされているようだった。

「あさちゃんがそこまで考えているなら、笹を分けてあげようね」

綾子は目尻を下げて言った。この顔があさみは大好きだ。

「ほんとう？ おばあちゃん、ありがとう」

これで自分だけの七夕ができそうだ。

「ああ、本当さ。ただし、おばあちゃんは笹を切られないから、おじいちゃんが牛の世話から帰ってくるまで少し待ってってくれるかい」

「うん、分かった」

「四時には一度帰ってくるから、もうじきだよ」

あさみは左の壁にかかっている時計を見た。三時三十分だ。

「それにしても、七夕なんてなつかしいねえ」

綾子はあさみが持ってきた『萩の月』の包装を開けながら言った。ロゴデザインが大きく印刷された箱が現れる。『萩の月』はあさみの大好物でもある。手のひらサイズの丸くて、中にカスタードクリームがたっぷりつまった、まるで満月のようなお菓子だ。最近になって姉妹品として、チョコ味も出た。

「おばあちゃんも昔、よく七夕をしたの？」

あさみは、チョコ味の『萩の月』をほお張りながら聞いた。

「そうだねえ……、あの頃はおばあちゃんとおじいちゃんはあまり会えなかったからね」

「え？ それって、どういうこと？」

綾子は半分になった『萩の月』を小袋の上に置いて、麦茶をぐくん、ぐくと二口飲んだ。すだれを通して差し込んでくる陽の光で、綾子の白髪が透けてオレンジ色に見える。どこか遠い目をしているようだ。あさみは思った。

「昔の話だけど、聞いてくれるかい」

綾子の思い出話が始まった。

階下で音がする。軽やかで規則正しい音だ。あれは、親方が織る音だろうか。いや、香奈かもしれない。香奈は聞いただけで誰が織っているのか分かるというが、未熟な自分には、音だけで織り手の違いなどまだ聞き分けられない。そもそも、織り方の名前すら、まだ全部は覚えていないのだ。向いていないのだろうか。

綾子は熱のある頭でそんなことをぼんやり考えていた。綾子がここに来たのはつい三ヶ月前。高校を卒業して、生まれた町から遠く離れたこの西の街に織物職人の見習いとして住み込みで働いている。最初の二ヶ月は、織り機にさわらせてもらうこともできず、毎日そうじばかりしていた。

朝早くから、先輩職人の織り機の下を掃き、床をすみずみまで拭く。食事の時間は、親の妻である良子の手伝いをした。職人になるには、まずは雑用やそうじからだ。故郷の父も言っていたから、承知の日々だった。けれど、黙々と織る先輩職人を見ると、早く自分も織ってみたいという気持ちがわいてきた。

そんな生活が二月ほど、続いただろうか。六月に入ったある日、織り機の前にいた親方が綾子に手招きをした。

「二ヶ月、よく辛抱したから、ちよつと早いけど今日から織りを教える」

無口な親方だったが、ありがたかった。見様見真似でやってみろ、と親方は言った。親方や先輩職人がなめらかに織っていくのを見て、綾子も縦糸に横糸をくぐらせる。一見す

ると簡単に見える動作も、やってみると難しい。横糸がまっすぐ入らないのだ。途中でひっかかったり、斜めになったりする。そのうえ、綾子がやると糸がたるむのだ。

二週間、綾子は織り機と格闘した。夢の中でも織っていた。雨の降る朝、起きてみると熱が出ていた。頭がぼうつとして、ふらふらする。朝食の席で耐え切れず座りこんでしまった綾子を見て、親方も良子も心配し、今日は寝ておけということだった。

こんな自分を情けなく思う。不器用なくせに、職人志望だなんて。故郷に帰ろうかとも思うが、たった三月で投げ出して帰ってくる自分を父母や近所の人々はどう思うだろう。帰れるわけがない。

ふと、幼馴染の顔が思い浮かんだ。自分とは違って器用で、やさしくて、いつも遠くの山々を見て笑っている人。そして、牛が大好きな人。

清彦は今、どうしているだろうか。

見慣れた街……大通り、商店街、店の看板、路面電車、行き交う学生の制服。何もかもが見慣れている。見慣れすぎていて普段はいちいち気にも留めないが、今こうして清彦が足を止めたのは、隣にいた雄一がこう言ったからだ。

「なあ、あれ見てくれ。何建てようとしてんだべ？」

雄一の視線の方向を見てみると、駅前中央商店街を沿うように、何やら柱のようなものが等間隔で何本も建てられている。

「ああ、アーケードだよ」

「アーケード？ そりや何だ？」

「通りにああやって柱を立てて、そこに屋根をがばっとかぶせるだろ。そうすれば、雨でも傘を差さずに買い物ができるし、商品の日焼けも防げるんだ」

「なるほどなあ。ほだものがあんのけ」

「最近、流行ってるんだってさ。最初は東京を中心に、今はこうして宮城まで」

「オラほの村には、あっただものねえど」

「だろうな」

「悪かったな、田舎だよ」

そう言って二人はクスクス笑った。雄一の地元は岩手の奥羽山脈のふもとの農村だ。バスは一日に二本。冬には冗談でも何でもなく、豪雪で交通機関が閉ざされてしまうらしい。

そんな田舎から大学に進学するために、雄一は今年の春に仙台に出てきて、今は学生街の一角で下宿をしている。きつと村一番の出世株に違いない。

「アーケードだけじゃなくてさ。ほら、あれ」

今度は清彦が公園の方を指差した。公園の一番奥に、白い塔が煙突のように生え出た三階建ての市庁舎が見える。

「市役所も新しくなるらしいよ。ほら、市役所の隣でブルドーザーが地ならししてるだろ。あそこに新しい庁舎が出来るんだ。今の古い庁舎は取り壊すんだって」

「たまげたなあ。なんだりかんだり新すぐなっくなあ。景気のイイ話だっへ」

「一昨年には広瀬川にでっかい橋が完成したし、あっちこっちに県営住宅もできたし」

「清彦、物知りだなあ」

「そりやあ、十八年もいれば詳しくなるよ」

そう言って清彦はため息をついた。だからだと歩いているうちに駅まで着いた。

「じゃあ、俺電車だから」

「おう。せばよ、明日の限でなあ！」

雄一は中学生みたいな笑顔で片手を挙げると、商店街の方へと歩いて行った。

清彦はジーンズのポケットから定期券を出して改札を通り、ホームのベンチに腰掛けた。そして、もう一度深いため息をついた。清彦の地元は、正確に言えば仙台ではない。仙台

の隣のベッドタウンである。そして清彦の実家は、そのベッドタウンの駅から更にバスで四十分ほど行ったところにある、牧場だ。それも肉牛、乳牛、鶏、馬を飼育している、宮城県下有数の巨大な敷地面積を誇る牧場である。さっきはいかにも「仙台っ子」を気取ってみせたが、清彦の家だって、程度の差こそあれ「山の麓にある田舎」なのだ。

「東京に行きたいなあ……」

ベンチにだらしなく身を預けたまま、思わず情けない声が漏れてしまった。言い終わってからハッと我に返って姿勢をただし、きよろきよろと周りを見渡した。が、誰も清彦のことなんて見ていなかった。清彦は胸を撫で下ろした。ベルの音が聞こえた。電車が来る。清彦は立ち上がった。

俺は東京に行ったのだ、と三ヶ月経った今でも思う。こうして大学からの帰路、電車に揺られながら何気なく窓の外を見ていても、未練が思考回路に侵入してくる。勉強は自慢ではないが、小・中・高と常にトップクラスの成績だった。高校三年の春の個人面談で、四年制大学進学を希望した際、担任の教師が「君なら東大にも行ける」と言ったほどだ。清彦はその言葉に目を輝かせ、家に帰ると早速夕食の席で両親に言った。

「俺、東京の大学へ行きたい」

そうしたら、父親に「べもなく

「ダメだ」

と即答された。

「どうしてだよ？」

清彦は食い下がった。

「お前、東京出て何を勉強するつもりだ？」

父親は険しい声で尋ねた。

「何、って……勉強」

「何の勉強をするんだ？」

清彦は答えることができなかった。父親は心の奥底を見透かすような目で清彦を一瞥すると、こう告げた。

「……お前はうちの牧場を継ぐんだ」

「嫌だ」

今度は清彦が即答した。

「どうして俺なんだよ？ うちには祥子もいるじゃないか」

食卓で急に名指された妹の祥子はあからさまに眉をひそめた。

「今はお兄ちゃんの話でしょ。私を巻き込まないでよ」

「家の話なんだからお前にだって関係あるだろう」

即座にやり込められて祥子はまたムツとした。父親が制止するように茶碗と箸を置いた。

「祥子は嫁に行くだろう。それに、清彦、お前は男だ。うちには男はお前しかいないんだ。

宮瀬牧場は代々長男が継いできた。私だってそうだ」

代々って言ったって曾祖父さんの頃からだろ、たかだか三代で何を大げさなことを、と清彦は心の中で毒づく。口に出して言わないのは、その三代に、中でも誰より父に対して、最低限の敬意は持っているからだ。父は戦時中、戦闘機をバラして運ぶための牛と軍馬を供給することで牧場を手放さずに済んだ。苦しい時代を母と二人三脚で切り盛りし、必死で牧場を守ったのだ。

「……大学は仙台の大学にするんだ。そして農学部へ行けばいい。私もそうしたんだ。その分の学費なら出してやる。ただ、もしお前が東京へ行くというのなら、一切の援助は出さん。この家と縁を切るつもりで出て行くんだな」

父はキツパリと言った。清彦は唇を噛んだ。悔しかった。自分が進んだからと言って、そのレールを息子にも強要しようとする父が憎かった。しかし、言い返すだけの言葉を、自身を持って提示できる将来設計というものを、自分は持っていなかった。

「……ごちそうさま！」

清彦はガタンと席を立つと、玄関へ向かった。

「ちよつと、清彦！ どこへ行くの！？」

今まで事態を静観していた母親が甲高い声で言った。

「外！」

まるで答えになっていない言葉を投げて、清彦はズックを突っ掛けて外へ出た。ドアの音が乱暴に響いた。

「外って、もう真っ暗よ！ ねえ、あなた」

「いいから、放って置きなさい。どうせすぐ戻るだろう」

父は無然として言った。

「私、お兄ちゃんがどこに行ったか知ってるよ。お兄ちゃんね、嫌なことがあると、いつもチエルシーのところに行くの」

「まあ、そうなの」

「チエルシーは俺の心の友、なんだって」

祥子はそう言って微笑んだ。父と母は思わず顔を見合わせた。父はすぐにまた仏頂面に戻って食事を再開したが、母はその口元がふつと柔らかくなったのを見逃さなかった。

「チエルシー。お前だけだよ、俺のことを分かってくれるのは」

清彦は猫なで声を出しながら、暗い牛舎の一角でチエルシーの喉を撫でていた。チエルシーは全てを達観したような瞳で清彦の手からもくと草を食べている。チエルシーは清彦が小学六年生の時に生まれた。彼女は乳牛でも肉牛でもない、ペットの牛である。清彦はチエルシーが生まれる時に初めて牛のお産を介助した。それまで牛というものはただどんどん繁殖していくのだと思っていた清彦は、チエルシーのお産に立ち会って、「命の大切さ」というものを身をもって学び、この牛を自分で飼いたい、と父に懇願したのだ。父は貴重な牛をペットにするのはどうかと首をひねったのだが、そこまで牛に興味を抱いた

清彦を見たのは初めてだったし、将来を考えて一頭の牛を一人で世話するのはイイ経験になるだろうと考え、世話は全て清彦がやることを条件として、誕生日プレゼント代わりに彼に与えたのである。清彦は精一杯格好いい名前を、と一晚中考えて「チェルシー」と命名し、父との約束を忠実に守り、毎日甲斐甲斐しく世話をした。そして昔清彦の腰のあたりまでしかなかったチェルシーは、今ではすっかり立派な体格になっている。

「ああ、俺本当に東京に行きたいのになあ……」

清彦がもう何度目かそう呟いた時のことだった。

「まゝた牛に話しかけてるのね」

急に声をかけられて慌てて振り向くと、そこには懐中電灯を手にした綾子がいた。

「うわっ！ 何だ、綾子か。ビックリした」

「ビックリしたのはこっちの方よ。真っ暗な牛舎で一人佇んでポソポソ話してる人がいる、って思ってた近付いてみたら、清ちゃんなんかもん」

綾子はニヤニヤと笑みを浮かべながら言った。

「って言うか何で綾子がここにいるんだよ。ここ俺の家だぞ」

清彦はわざとぶっきらぼうに言った。

「お母さんから頼まれたの、卵と牛乳買って来てって。お母さんドジだから、昼のうちに清ちゃん家に行くの忘れちゃったんだって」

「へえ。もう済んだの？」

「うん」

綾子は左手の風呂敷を掲げてみせた。でこぼこに膨らんでいる。

「……送るよ」

清彦はシャツに付いた牧草を払いながら言った。

「いいよ。いつも通ってる道だもん」

綾子は首を振って断ったが、清彦は

「でも、少し距離あるし、道暗いし」

と言うと、有無を言わず道を先導するように、牛舎を出た。綾子は嬉しさに頬を染めた。

「またね、チェルシー」

綾子が照れを隠すように頭を撫でると、チェルシーは鼻を鳴らした。

牧場は静まりかえっていた。二人は柵越しの脇道を、しばらく黙って歩いた。何度か強い風が吹いた。遮るもの無い風は山から一気に牧草地を吹きぬけていく。長袖のシャツを着ているも肌寒い。東北の夏はまだ少し先だ。清彦はポケットに手をつ突っ込んだまま、綾子は懐中電灯で道を照らしながら少し後ろを付いて歩いた。

「……清ちゃん、牧場継がないの？」

あまりにも唐突な綾子の切り出しに、清彦は思わず歩みを止め、振り返った。綾子は不安そうな顔をしていた。

「……牧場なんて、カッコ悪いから嫌だ。俺は絶対に家は継がない」

清彦はボソリと言った。そしてまた歩き出した。

「どうしてそんなこと言うの？ 代々受け継がれてきた家業があるなんて、素晴らしいことじゃない」

綾子はさすがるように歩みを速めた。ついには並んだが、清彦は綾子の目を見ようとはせず、虚勢を張るように鼻で笑った。

「そういうことは、外の人間だから言えるんだよ。代々受け継がれてきた家業なんて、たとえ医者でも俺は嫌だね。俺は東京に行きたいんだ」

「東京出て、何するつもりなの？」

綾子は問い詰めるような口調で言った。清彦は顔が強張るのを感じた。綾子は険しい目で清彦を見ていた。これじゃあさつきと同じだ。

「……何か、でっかいこと」

清彦は狼狽を押し殺すように、低い声で言った。しかし、その言葉に中身が無いのは明らかで、清彦は言ってから後悔した。綾子は清彦の答えに対し、何も言わなかった。

気付けば、綾子が清彦の先を歩いていた。おさげ髪が、綾子の歩調に合わせて揺れていた。清彦はそれをぼんやりと見つめながら、いつの間にかこんな髪が伸びたんだろう、と思った。小学生の時も中学生の時も、綾子の髪型はおかっぱだった。高校生になって、互いが別の学校に進んでからは会う機会がぐんと減った。そして、こうしてたまに会う度に、綾子はどんどん女らしくなっていく。

「私ね、夢があるんだ」

綾子は前を向いたまま言った。

「高校出たら、京都に行こうと思ってるの」

「京都？」

「そう」

綾子は振り返ると、笑顔で言った。

「私、着物を作る人になりたいんだ」

「二日町〜。二日町〜」

いつの間にか電車は乗り換えの駅に到着していた。感傷にふけていた清彦は慌てて電車を降りた。

あの時の綾子の笑顔が、忘れられない。今までで一番綺麗で、強かった。きっと、今彼女は夢に向かって一心不乱に努力していることだろう。揺るぎない気持ちを持って。それに比べて、俺は……。

清彦は気持ちを切り替えるように大きく首を回した。骨の鳴る音がした。

あの頃の自分の甘さが身に沁みるようだ。結局、東京に出なくてよかったのかもしれない。中途半端な気持ちで東京に行っても、主体性の無い自分のことだ、飲み込まれてしま

うに決まっている。大人しく、親父の言う通りにこっちの大学へ進学して、将来の牧場経営に備えて農業を学ぶ。それがきつと、身の丈に合った道なのだ。

清彦はゆるやかな足取りで歩き出した。

誰かが階段をあがってくる音で綾子は目が覚めた。障子から差し込む光がだいぶまぶしくなっていることに気づく。

「起こしてもたかね」

先輩職人の香奈だった。盆を持っている。

「いいえ、そろそろ起きようと思っていたところですよ」

「あかんで。まだ寝とらんと」

香奈はそう言って、優しく微笑んだ。綾子はこの七つ年上の香奈を姉のように思っていた。弟子入り後、男職人が多い織物職人の中で、香奈の姿を見つけた時は幾分緊張が取れた心持ちだったし、女同士のほうが何かと教えやすいだろうからと、親方は綾子の掃除や身の回りの指導を香奈に任せた。香奈は親切に何でも教えてくれたし、二階の住み込み部屋では同室になり、寝る前のおしゃべりに興じることもあった。たいてい、香奈が話して綾子が聞き役なのだが、無口な親方が時々休憩のたびに、だし殻のイリコの皿を手に外に出て行くのは、一服するのと逢引きのためなのだと聞かされた時は、大声を上げそうになったし、よくよく聞いてみると、その逢引き相手が三毛猫のミイ太、実はオスと聞いて笑い転げたものだった。三毛猫のオスは珍しいということを教えてくれたのも香奈だった。

「お腹すいとらんかもしれんけど、食べてな」

盆の上には、どんぶりに入ったうどんがあった。湯気が立っていて、食欲をそそる。

「あっ、今、お腹が鳴ったな」

腹の虫は正直だった。

「え……、聞こえちゃいましたか？」

「当たり前や、そないな大きな音、聞こえるにきまつとる」

だいぶ気分がいい。きつと食べれるはずだ。

「ありがとうございます。じゃ、いただきます」

麵をすすると、口の中につるつると心地よく入ってきた。京風のあっさりした味付けに、ねぎとしめじとカマボコが入っている。つゆを飲むと、胃の中まであたたかくなった。

「もう具合、よくなったみたいです。ありがとうございます」

「かまへんかまへん」

香奈は手をぶらぶら振り上げながら、笑った。この人はいつも明るくて元気だ。なのに私は、と思う。

「香奈さん、私、自分の不器用さが嫌になるんです。親方からお許しをいただいて、始めてもう二週間にもなるのに、全然覚えられないし……」

腹の虫をおとなしくさせたら、弱音の虫が出てしまった。

「綾ちゃん、あんた何言うとるん。そないな早う、極められるわけない」

「でも自分でも、覚えが悪くなって思うんですよ。親方にも半ば呆れられているし……」

そうなのだ。初めは笑っていた親方の目が最近はずう。どこか冷たいし、覚えの悪い弟子を取ってしまったと後悔しているのではないだろうか。

「あんなー、今から根を上げてどうするん。うちかて始めたばかりの時はえらい下手やったんよ」

「え？ 香奈さんが？ あんなに上手いのに、嘘でしょう」

「ううん。なんべんも失敗したし、覚えられなかったよ」

「ほんとに？」

「二週間くらいでできるんやったら、職人はいらんよ」

そう言って、香奈は盆とともに立ち上がった。

「そや、これ。綾ちゃんに渡そうと思っとったんや」

便箋綴りと封筒だった。

「これで、郷里のお父はんお母はんの手紙を書き」

「え？」

「綾ちゃん、今、苦しゅうて少し里心がついとるんや。ほいなら、思い切って書いたほうがすつきりすると思うで」

「そんな……、情けないこと書けませんよ。私、これでも胸張って出てきたんですから。いつか故郷に錦を本当に織って帰りたいって大風呂敷広げちゃった……」

「そうなん？ じゃ、なおさら頑張らんと。なんせ大風呂敷なんやから織るのは大変でっせ」

ふふふ、と戸口で香奈がいたずらっぽく笑う。

「もう、香奈さんったら。大風呂敷は冗談ですよ。それに、錦ですってば」

でも、香奈のおかげで胸に花が咲いたようだった。この花を育てながら、もう少し頑張っていこう。そう思えた。

目の前には、先程、香奈にもらった便箋綴りと封筒がある。和紙に、あじさいの花と舞妓の絵が印刷された美しい便箋だ。綴りの真ん中程から絵が変わって、今度は五重塔の風景が印刷されている。

父母には書けないが、あの人になら書けるかもしれない。綾子は引き出しからペンを取り出した。

清彦が家に帰ると、時計の針は五時を回っていた。夏至を過ぎたこの時期の太陽は、沈む気配を一向に見せない。玄関を上がり居間に行くが、いつも出迎えてくれるはずの母の姿が見えなかった。どこか買い物にでも行ったか、おおかた綾子の母親と立ち話にでも夢中になっているのだろう。鞆を置き、チェルシーのいる牛舎に向かう。

母屋を出て、牛舎までは少し距離がある。牧草地沿いの道を五十メートル程行くと、青いトタン屋根の牛舎が見えてくる。チェルシーはその一番奥にいる。

父が見かけない男性とこちらに向かって歩いてくるのが見えた。その男性は農協の文字の入ったツナギを着ている。すれ違いごしに清彦は会釈をした。いつものように、飼料や種付けのことなんかで農協の人が来たのだろう。

牛舎に入り、肉牛たちと乳牛たちの間を通り抜ける。清彦はチェルシー以外の牛たちに名前をつけることはしない。いったん名前をつけて愛着を持ってしまえば、別れがつかなくなるからだ。肉牛は肉になるために売られていくし、年老いて乳の出が悪くなった乳牛もまた売られていく。それが牛たちとこの牧場の宿命だとは思うのだが、やはり悲しかった。そうした別れは子どもの頃から幾度となく経験してきたが、いまだに慣れることがない。だから、せめて最低限の愛着でいようと名前はつけないことにしている。

チェルシーのところによくやく辿り着いた。チェルシーはいつものように、黙々と飼いや葉を食べていた。寝床の藁を替えてやらなければいけない。

用具置き場に行った清彦は、父と先程の男性が話しているのを見つけた。なんとなく出て行きづらくて、開き戸の影でしばらく待機することにした。

「ええ、全部です」

父の低い声が聞こえる。

「では、この牛舎のすべての肉牛と乳牛をお貸しいただけるのですね」

「はい、早ければ来月中旬に」

とんでもない話を聞いてしまった。

その後、チェルシーの寝床をどのように替えてやったか、あまり覚えていない。チェルシーの腫と、飼いや葉を反芻する口の動きしか覚えていない。

夕食の席で、清彦は父の顔を上目遣いに見た。黙々と箸を運ぶ父。何も言わないつもりなのか。

「父さん、さっきの人と何を話してたんだ？」

「新しい飼料のことだ」

父は箸を止めない。ほうれん草のごま和えを食べている。

「嘘ついてるね」

「嘘もなにも、本当のことだ」

「俺、聞いてたんだよ。牛を売るって」

アジの皮をはがす父の箸が止まった。

「牛、全部売っちゃうんだろ、そうだろう」

「まだどうなるか、分からない」

「そんなの、嘘だろ。なんで売るんだよ？」

「肉牛を売って手に入る金よりも、飼料代のほうが高くつく。うちはずっと赤字だ」  
知らなかった。

「でも何も、全部売らなくなったっていいじゃないか」

「違う、貸すんだ」

これは嘘だ。父は牛を担保に借金を返済するつもりなのだろう。そのくらい清彦にも分かる。そして、十中八九、貸した牛は返ってこない。

「でも父さん、チェルシーは別だよな。あいつは俺の牛なんだから」  
父は黙っていた。

清ちゃんへ

前略、お元気ですか？仙台はもう入梅したでしょうか？京都はじめじめとした蒸し暑い日と肌寒い日が交互に続いています。菖蒲や桔梗、あじさいなどが露に濡れて綺麗に咲いています。

私は元気でやっています、と言いたいところなのですが、実は今病床でこれを書いていきます。と言っても、ただ風邪をひいただけなので、心配しないでね。今日は親方の好意でお休みをいただき、それから仲の良い先輩から封筒と便箋をいただいたので、清ちゃんに手紙を書くことを思いつきました。本当は、実家に書きなさいって言われたのですが、どうしてもそんな気にはなれなくて……。

実は私、今ちょっと弱気になっています。掃除や雑用をこなすだけの下働きは二ヶ月続きました。伝統的な職人つて下積みが年単位つていうのも珍しくないからそれなりに覚悟はしていたのですが、うちの親方は実務主義なところがあつらしく、意外と短期間で済みました。下働きの期間は、それこそ目の前にあることをこなすのが精一杯で、その日その日を夢中で生きていたように思えます。実際、あまり故郷のことは思い出しませんでした。思い出す暇が無かったのかもしれない。六月に入つて、ようやく織りの仕事に就かせてもらいました。仕事と言うか、正確に言うと、練習です。受注した着物をいきなり織るなんてことは、当然まだ出来ませんから。一週間毎に親方から課題が出されて、その模様を織るのです。が、肝心の織り方を殆ど教えてもらえないのです。流石に基本の基本はしっかりと教えてもらいましたが、後は見様見真似でやってみろ、と言われる。試行錯誤して織つてはみるのですが、上手くいくはずもなく。悪戦苦闘しているのを見かねた先輩が、時々こそつとコツを教えてください、どうにか前に進めてはいるのですが、それでもまさに「牛の歩み」です。

決して私はこの環境が嫌なわけではないのです。親方にも、先輩にも、工房の方々にも、本当に感謝しています。遠い東北の田舎から出てきた私を、邪険に扱うこともなく、「金の卵」みたいに大事にしてくれます。嫌なのは、私自身の弱さなのです。目の前のことで一杯で、逆境にくじけやすい自分が嫌なのです。自分一人の足では立つこともできず、何も守れない、未熟な私。こんな風に「病は気から」を地で行つているところも嫌です。こうして熱に侵された頭でぼんやりしていると、ふと「仙台に帰りたい」という弱音がよぎったりして……そんなところにも嫌気が差します。

もしかしたら私は、自分の弱さや未熟さを昔から心のどこかで自覚していて、何かを守れる人になりたいと思つて、この仕事を選んだのかもしれない。工房に入つてくる職人見習いは年々減っています。こうしてめまぐるしく変わっていく社会だからこそ、変わらないものを大事にしたいと最近は何に感じます。大事にするためには、まず私。私が強く

ならないと。

一気に書いたら、何だか楽になりました。自分のことを書くだけ書いてスッキリするだなんて、勝手だよ。でも、清ちゃんには何でも話せるような気がするのです。

清ちゃんは、大学は楽しいですか？ 友達たくさん出来ましたか？ 勉強大変じゃありませんか？ ……あ、でも昔から優しくて成績の良かった清ちゃんだから、そんなことは要らない心配ですね。でも、一つだけ言わせてもらえたら、私はやっぱり一年前、清ちゃんが「牧場を継がない」と言っていたこと、あのことが気になります。私は、あの時安易に「代々受け継がれている家業があるのは素晴らしい」なんて社交辞令みたいに空っぽなことを言ってしまったことを後悔しています。そんなところに、清ちゃんの心を決められるものは何も無いって分かっていたのに。ただ、私は清ちゃん家の牧場が本当に好きだから、どうしても言わずにはいられなかったのです。あの牧場が誰か他の人のものになってしまったり、無くなってしまったりすることを考えただけで、胸がキリキリと痛むのです。けれど、結局決めるのは清ちゃんだから。私は清ちゃんが自分の意志で選択したことなら、その結果がどんな風になるうと構いません。今清ちゃんが進んでいる道が、清ちゃん自身で選んだことを、そしてもしそうじゃなかったとしたら、これから先清ちゃんが進んでいく道が、清ちゃん自身で選んだものでありますように、と。そう願っています。

いただいた便箋がもう最後になってしまいました。今度仙台に帰ることができるとはいつになるかはまだ分かりません。来月の七夕祭りには行きたいのですが、仕事が忙しいし、こうして体調を崩してお休みまでいただいでしまったので……。もし帰れたら、お祭り、一緒に行ってくださいませんか？

それでは、くれぐれも体には気をつけて。

草々

追伸 清ちゃんの恋人、チェルシーは元気ですか？

綾子はペンを置き、深く息を吐いた。最後の最後に、大胆なことを書いてしまった。お祭りに一緒に行くってくれだなんて。追伸でおちゃらけて誤魔化してはみたけれど、この一文の熱を冷ますには至らない。書いている時は一気に書いたけれど、こうして読み返してみると顔から火が出そうになる。早く封筒に入れてしまおう。綾子は六枚の便箋を重ねて三つ折りにすると、あじさい柄の封筒に入れ、糊で封をし、宛名を書いた。書き終わると、かすかに眩暈を覚えた。慣れないことはするものじゃない。少し横になろう。綾子は机に手紙とペンを置き、布団に身を横たえた。

「綾ちゃん」

揺さぶる手の感触で目が覚めた。綾子はゆっくりと目蓋を開いた。香奈だった。

「そろそろお夕食の時間やけど、具合ようになった？ 下に来て皆と一緒に食べられへん？ それとも、ここに持ってこようか？」

綾子は身を起こした。もう眩暈はしない。額に手を当てた。汗ばんでいたが、もう午前中のように熱くはなかった。

「いえ、もう大丈夫です。着替えて皆さんと一緒に食べます」

「そら、よかった。朝はえらい辛そうやったけど、顔色もだいぶ良うなったみたいやわ」

香奈はそう言って微笑んだ。綾子は香奈の笑った顔が好きだ。上品な口元が柔らかく上がると、こちらまで笑顔になってしまいそうになる。綾子は香奈の持ってきた手ぬぐいを広げて顔に当てた。冷たくて気持ちいい。

「あれ、手紙。もう書いたんや」

「香奈は机の上の封筒に気付いた。綾子は手ぬぐいを顔から離した。」

「あつ、香奈さん、それ、まだちよつと」

綾子は慌てて布団から出ようとしたが、香奈は既に封筒を手を取っていた。

「どれどれ……ん？ 宮瀬、清彦、様？」

香奈は不思議そうな顔をしたが、やがて全てを飲み込んだような表情になった。

「ふうん。なるほどね。道理で元気になったわけやね」

香奈はわざと意地悪そうな笑顔を作って、綾子の顔を覗き込んだ。綾子は恥ずかしさのあまり俯いた。

「遠くて近きは男女の仲とはよく言ったもんやなあ」

「やだ、違います、そんなじゃないですってば」

「照れない照れない。うちは全てお見通しや」

「だから違いますって」

綾子の顔はもう真っ赤だった。けれど綾子が言い返せば言い返すほど、香奈は面白がっているようだった。

「これ、出してきてあげよか？ あつ、でも、こういうのはやっぱり自分で出しに行きたいやろね」

「香奈は少し考え込んだ。」

「そや。明日のお昼にでも、うちが用事を言いつけてあげよ。ちよんど回さなあかん回覧板があったはずや。それを持ってもらおうついでに、その手紙も出して来るとええわ」

「香奈さん……ありがとうございます」

綾子は頭を下げた。香奈の心優しい計らいに、思わず涙がこぼれそうになった。

「ええって。これくらい、かまへん」

香奈は笑って手を振った。綾子は目が潤んだが、必死でこらえた。泣いてはいけない。ここで泣いたら、香奈を心配させてしまう。全く、体が弱っている時は涙もろくなってしまうっていけない。

強くなるんだ。さつき、手紙に書いたこと、あの決意、気持ちは嘘じゃない。

父から牛を貸し付けに出すつもりだと聞かされた晩、清彦は憂鬱のあまりなかなか眠りにつけなかった。何度も寝返りを打ち、何度も時計を見た。

跡取りは自分の望んだ道ではなく、やむをえず進んだ道にすぎないと思っていたのに、実際こうして牧場が牛を売るほど切迫している経営状態であること、莫大な借金があるということを知ると、何か自分にできることは無いかと頭をめぐらせてしまう。もちろん、いくら考えても何のアイディアも浮かばない。たとえ浮かんだとしても、経営には素人同然の自分が考えた策なんて程度が知れているわけだが。

最初のうちは、牧場の経営が悪化すればいずれば手放すことになり、自分はここを継がなくてもよくなる、という邪な予測も立てた。そうしたら一切のしがらみから解放され、別のどんな道でも歩めるだろう、東京にだって行けるだろう、金は無いけれどこの経済成長めざましいご時世だ、東京に出れば製造業の仕事はいくらでもある、金を貯めて本当にやりたいことを見つければいい、と胸を躍らせた。しかし、それも一瞬のことだった。あまりに浅はかであることに気付いたのだ。わずかな間でもそんな考えに胸を高鳴らせた自分に嫌気が差した。

牧場が倒産すれば、今までのような暮らしは出来なくなる。大体にして、家畜と土地を手放して、どうやって生きていくというのだろう。父は牧場オーナーの三代目だ、それ以外の生き方は知らないだろう。二十歳で嫁いだという母も同じだ。祥子はまだ中学二年生だ。高校は当然行きたいだろうし、短大進学も視野に入れているかもしれない。家族だけじゃない、うちで働いている従業員たちにとって責任がある。やはり、牛を担保に金を借りることで経営状態を良くしようと思うのは正しいことなのだ。

でも、チェルシーが売られていくのは嫌だ。父は、牛を「売る」のではなく、「貸し付ける」のだと言った。何の名目で？ 真っ先に思いつくのは、繁殖用貸付だ。あその牛舎ににいるのはみんな三歳未満の雌牛だから。だが、チェルシーは違う。チェルシーは今年で七歳になる。だから繁殖には使えない。となると、導き出せる答えは一つだ。チェルシーは、淘汰される。それだけは何としても防がなくてはいけない。だが、自分に一体何ができるといえるのだろうか。……堂々巡りだ。

気付けば、朝の五時だった。カーテン越しにもうつすらと光が差しているのが分かる。早番の従業員は既に起きて、もう作業に取り掛かる頃だろう。結局一睡も出来なかった。今頃になって眠気が頭の奥に兆している。だが、今から寝たんじゃ二時間も寝れない。一限を寝過ぎしたりなんかしたら大変だ。清彦は思い切って布団から起き上がった。

早朝の陽光が眩しい。清彦は思いっきり体を伸ばした。久しぶりに作業着に袖を通したが、こころなしかキツく感じる。大学に入ってからまた少し背が伸びた。

「清彦さん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

倉庫の脇を通りかかった時に声を掛けてきたのは、今年入ってきたばかりの従業員、美咲だった。特別美人という顔立ちではないが、そばかすとツンと上を向いた鼻に愛嬌がある。農業高校出身らしく、作業着姿も結構サマになっている。

「珍しいですね、清彦さんがこんな時間から牛舎にいるの」

美咲は作業の手を止めて、駆け寄って来た。

「何だか眠れなくてさ。それより美咲ちゃん、敬語使わなくていいよ。同い年なんだから」

「いやあ、私、敬語じゃないと訛ってしまいますから」

そうは言うが、美咲の敬体標準語には十分にズーズー弁が入っている。清彦は、恥ずかしがることはないのと思ひ、

「そったら、かまわね！ オラだってもそれで通じるだからよ」

と言いつつ放った。美咲は口をあぐりあけて言葉を失っていた。ちよつとからかうだけのつもりだったのだが、美咲には衝撃が大きかったようだ。清彦はニヤリと笑ってみせた。普段坊ちゃん坊ちゃんしている清彦にだって、地元の言葉くらい喋れる。それを普段喋らないのは、父親の帝王学とやりに反するからだ。従っているうちに地になってしまったのが癪だ。

「飼料運んでるんだね。手伝うよ。あっち？」

清彦はポケットから軍手を取り出して言った。美咲はまだ化け物でも見るかのような目で無言で細かく何度かうなずいた。清彦は飼料の袋を台車に積み上げると、牛舎へと運んだ。

他の牛と同じように、チェルシーはもう起きていた。チェルシーは清彦の姿を目に留めると、首をぶるんと振り、ぶもくと鳴いた。

「おはよう、チェルシー。お前こんなに早起きなのか。ごめんな、今度からはもつと早起きしてくるからな」

いつも清彦は学校へ行くついでにチェルシーに餌をやっていたのだが、それだと空腹でたまらないだろう。清彦は反省した。実際は、早番の従業員が他の牛に餌をやるついでにチェルシーにもあげているのだが。

清彦は餌を食べているチェルシーの喉を撫でた。今度、という自分の口にした言葉に胸が痛んだ。

父は嘘つきだ。チェルシーが生まれた時、俺に「くれた」くせに。最初から最後まで世話をするというのが約束だったじゃないか。その約束すら守らせてくれないと言うのか？しかし、そんなキレイな約束事、家族の、従業員の、牧場の現実の前ではもろくも崩れ去ってしまう。

力が欲しい、と思う。チェルシーを守る力。チェルシーだけを守りたいわけじゃない。でも、まずはその力を入れることができれば、それはやがて、ひいては自分を、家族を、従業員を、牧場を守る力へと変わるだろう。強くなりたい。清彦は陽の光を浴びて目

を細めるチェルシーの背中にそっと手を置いた。

廊下と障子を隔て、窓からほのかに差し込む光の白さが増してきた。空が明るくなってきたのだろう。遠くで、スズメの鳴き声がする。今日も兄弟で、じゃれながら雨樋伝いに飛び回っているのだろうか。

織物工房の朝は早い。香奈を起こさないように、綾子はそっと布団の中から抜け出た。手早く身支度を整え、階下の洗面所に向かう。鏡の中には、いつもの綾子がいた。口の端を上げてみる。よし、大丈夫だ。

台所の三和土に下りると、良子がすでに朝食の支度をしているところだった。

「おはようございます。昨日は申し訳ありませんでした」

「あら、綾はん。もう大丈夫なんか」

「はい、もうすっかり。私、お味噌汁を作りますね」

「おおきに。頼むわ」

こちらでは味噌汁は白味噌を使う。慣れない京風の味付けだったが、毎食の料理の手伝いをするうちに綾子はいつしか親しみを感じるようになっていた。だしに使ったいりこは、小皿に入れてよけておく。親方とミイ太の逢い引き用だ。豆腐、にんじん、京菜を切って鍋の中へ入れた。あとは、盛り付けのかまぼこを切って、出来上がりを待つだけだ。

そろそろ二階のほう騒がしくなってきた。兄職人たちが起きてくる頃だ。人数分の器を用意する。親方と良子、そして兄さん職人と香奈と自分とで十人以上にもなるのだから料理の数だけ食器を用意するのは結構大変だ。郷里では父母と弟二人との五人暮らしだったため、綾子にとって、この大所帯はまるで別世界のように感じられた。しかし、親方を筆頭に皆それぞれ織物に打ち込むこの工房の空気は嫌ではなかった。

朝食の洗い物をすませ、綾子は自分の織り機の前に座る。一日ぶりに見る織り機は、うなされた夢の中で見たものとやはり同じだ。糸を用意し、基本の綾織りを織ってみることにした。あんたの名前の織り方なんやからしつかり織りいよ、という親方の言葉を思い出す。綾織りは平織りの次に易しい織り方だ。タテ糸がヨコ糸の上を二本、ヨコ糸の下を一本それぞれ交差させ、仕上がりは糸の交錯する点が斜めに走る。綾目と呼ばれる、この交わった点が特徴だ。親方や先輩職人たちはものの見事に綾目を織り成していく。

しかし綾子が織ると、綾目はなぜかずれてしまう。糸の張り方が均等になっていないのだ、という親方の注意を思い出して、糸を張ったものの今度は張りすぎて、織り目はさらに乱雑なものになる。

ため息をついて、綾子は顔を上げた。工房の中には、一心不乱に織り続ける職人の息遣いと織り機の音だけが、ただ聞こえる。他の音は最初から存在しないかのように。

綾子は急に、自分だけ取り残されたような気持ちになった。自分と織り機だけを残して周囲がまるで潮が引いていくかのように、さっと逃げていく。

「綾ちゃん」

香奈の声で我に返った。心配そうに綾子の顔を覗き込んでいる香奈はそっと綾子の肩に手をやった。

「もう、どないしたん。ぼうつとして」

「すみません」

「また具合悪いんとちやう？」

香奈は眉根を寄せる。

「いえ、大丈夫です。すみません、ぼうつとしてました」

「昨日のあれ、覚えとる？」

「何だろうか。」

「え？」

「ほら、あれや、あれ」

香奈はにやにやしている。何か、あったらどうか。

「んもう、回覧板や。昨日言ったやろ」

「あ、そうでした。すみません」

そうだ、昨日、香奈が私に今日、回覧板を持っていく用事を頼むと言っていた。すっかり忘れていた。

「親方には許可をもらってあるから、はよ行ってき」

渡された回覧板には、分厚い茶色の表紙に「西陣連合組合」と書かれていた。それから香奈は、てがみ、と口の形だけで言っ、意味ありげな目配せをした。綾子もそつとうなずいて返した。

西陣連合組合というのは、西陣織の職人で作られた組織である。西陣織は一人の職人が作るのではない。完成に至るまで実に二十以上の工程があり、多くの職人の手を経て、出来上がるものなのだ。凶案職人が凶案を描き、別の職人が糸を染める。そして、染め上ってきた糸を糸枠にまきとる作業を糸繰り職人が行い、整経職人が糸を織物に必要な長さの本数に揃えていく。織機に糸を据え付け、織り職人が織っていく。これらの工程が欠けても、西陣織は成り立たない。西陣織という終着点を目指す、いわば家族のようなものである。それゆえ、西陣の職人たちは月に数回、会合を開き、西陣全体の問題について活発に意見を交わしていた。綾子の親方もたびたび参加している。回覧板はその会合の開催日時を知らせるものだった。この工房から、次に回すのは凶案職人のみなみ屋だ。

工房を出てすぐ裏は狭い路地が続いている。初めてここに来た時は、さすが京都だと思ったものだ。陽の光があまり差し込まないこの路は、薄暗く表通りとは異なった様相を見せている。華やかな表通りを持つこの街のもうひとつの顔。ひとたび路地に入り込めば、しっとりとした薄暗さが包み込む。その薄暗さとあいまって、古ぼけた裏木戸や石畳が綾子にはどこか妖しさを感じさせ、古都の魑魅魍魎が出てくるのではないかと実際、びくびくしていたのだ。もつとも、それはこの街に来た初めのことだけであったが。

今は、だんだんこの古い街が好きになりつつあったのだ。表通りの石畳沿いのこの道に

は、川沿いに綾子の好きなあじさいの花が青紫や赤紫に色づいている。清彦への手紙に書いたのは、ここに咲くあじさいのことだった。いつのことだったか、そういえば清彦とあじさいを見たような気がする。清彦の家の庭に咲いていた大株のあじさいを見て、綾子は一番好きな花はあじさい、と言ったのだ。それを聞いて清彦が、あじさいの花に見える部分は本当はガクと呼ばれる部分で、花は真ん中についている小さな部分にすぎない、と講釈をたれた。清彦は大学に進学するくらいなのだから、頭がよく、いろいろなことを知っている。でも綾子はなんだか悔しくて綺麗ならどっちだっていいじゃない、と拗ねた覚えがある。

そんなことを思い出しながら川沿いを歩いて行くと、郵便ポストが見えてきた。朱色で角型のポストだ。初めてこのポストを見た時、綾子はとても驚いたのを覚えている。故郷のポストは丸型で、こじんまりとしていたが、この街のポストは大きい。何でも入るような気がする。形はどこか、豆腐のようだと綾子は思った。その時、ポストの陰で何かが動いた気がした。丸っこい何か。

ミイ太だった。

「あれ、ミイ太」

綾子を見上げてミヤーと鳴くその猫は間違いなくミイ太だった。三毛猫と言っても、白い毛が多くて、黒と茶の毛はしっぽのほうに申し訳程度についている。

「お前、こんな所まで来るんだ」

もちろん、返事はない。ミイ太はただじっと見つめるだけだ。

十五円切手がすっかり貼られているのを確認して、綾子は手紙をポストの中にそっと落とした。今日投函すると、清彦の元に届くのは三日後ぐらいだろうか。

ミイ太はポストの陰から出て、歩き出している。

「待ってミイ太。私もそっちの方向だから。一緒に行こう」

返事はない。けれど、心強い気がした。これから、回覧板を回しに行くのだ。みなみ屋は向こうの角を曲がればもうすぐだ。

綾子はミイ太のしっぽを追いかけた。

清彦の腹の虫が鳴いたのと、二限目の終礼を告げるチャイムが鳴ったのはほぼ同時だった。朝、チェルシーに飼料をやって動いたせいとか、いつもよりも空腹感がある。一般教養の英語の授業はどちらかと言うと高校の授業の延長線上のようであり、退屈だった。

「そら、学食行くべ」

雄一は荷物をさっさとまとめて、もうすでに立ち上がっている。大学生活において、この男の何よりの楽しみは、学生食堂なのだ。今日は清彦も同感だった。

第一教育棟の隣にある食堂は、昼休みが始まったばかりとあって、学生たちでごったがえしていた。清彦と雄一はそれぞれメニューを選び、注文し、やかんのお茶を湯飲みにい

れ、盆が人にぶつからないよう細心の注意を払いながら一番奥のテーブルの席に座った。

「また、カレーライスなのか。よく飽きないな」

雄一は今週で三回目のカレーライスをほおぼっている。実に美味そうに食べるな、とうどんをすすりながら清彦はひとりごちた。

「カレーライスはうまいべ、肉が入ってるしよ。それに、皇太子様もお好きだとか。同じ物を食べるなんて、光栄だっきゃ」

「へえ、そうなのか」

「んだ」

「でも、皇太子様が召し上がるのは、銀座や赤坂のホテルで、それも一流の料理人が作ったやつだろ。そんな有難いカレーライスと、うらびれた学食のカレーライスを比べて、同じだって言ってもさ」

清彦は少しいじわるを言ってやった。また、東京のことを思い出したからだ。

「なんも。オラ達庶民が皇太子様が召し上がるメニューと同じ名前のものさ食べるだけで、ただでねえじゃ」

妙な理屈だと思ったが、清彦は黙っておいた。

「そういえばよ、インド人はカレーライスを手で食うんだと。ほんにすごい」

「まさか、だって手が汚れるだろう」

「んでね、ほんに手づかみで食うんだと。それでも、インドのカレーライスはもう少し乾燥したものらしいけども」

「よく知ってるな、そんな変なこと」

まあな、と言って雄一は得意そうに笑った。

「ところでよ、清彦が肉の中で一番好きなのは何だ？」

「何だよ、突然」

「まあ、いいべな。で、何が好きだきゃ？」

今まで食べたことのある肉を思い浮かべながら、清彦は考えた。

「鯨肉」

「わい！ おめ、ウソだべ？」

雄一は心底驚いた顔をした。

「いや、ほんとに」

「なしてあつただものが好きなんだ？ 給食の鯨肉の竜田揚げ、うだで不味いべよ」

「いや、少し固いけど嫌いじゃなかったよ」

「なんたら、ひよんな奴だなあ」

週に何度も同じメニューを食べる奴よりまともだ、と清彦はぼやいた。

「オラは牛肉が一番好きだよ。家で食べるのは年に数えるくらいだったけども、あの美味さは忘れられねえじゃ。清彦だって、家では食うべ？」

「それはそうだけど……」

「あつただ美味えものはねえじゃ。食えば、欧米人のようにでつけえ体格になるごつた。栄養がいつぺえだすけ、欧米人は丈夫にちがいね。それに比べてよ、オラ達日本人は貧弱でわがね。日本人はこれから牛肉をもっと食うべきだよ」

雄一はスプーンを振り回しながら雄弁に語った。

「せばよ、そのために、オラ達は農学部にいるんだべ。畜産と酪農の明るい未来に乾杯！」

雄一は清彦に無理矢理、湯のみを持たせ、ほくほくの笑顔で高らかに言った。

牛舎にいる肉牛たち、乳牛たち、そしてチェルシーを思い浮かべながら清彦は小さく溜め息をつく。同時に、授業中も頭を抱えていた重苦しい悩みが再び這い出てくるのを感じた。

自分はどうすべきか、と。

それから三日間、清彦はチェルシーを救う方法を考えたが、いいアイディアは浮かばず、思考回路が堂々巡りで澱んでいく一方だった。チェルシーの世話をしに牛舎へ行く足取りは重かった。何も知らないチェルシーは、穏やかな目をして草を食んでいる。それを見ると清彦はますます胸が締め付けられ、焦燥感に掻き立てられるのだった。父とはあれ以来、殆ど口をきいていなかった。夕食の席で顔をつき合わせても、頑なに無言を貫いた。父も同じだった。祥子が少しでも空気を和らげようと、学校であったことなどを大げさな身振り手振りで報告していたが、相槌を打つのは母だけで、宮瀬家の食卓は未だかつて無いほどギスギスとしていた。

翌日の金曜日は、午前中が休講だった。教授が東京での学会に参加するため、というのは先週の授業で既に聞かされていた。清彦は早朝に起きて美咲達と共に牛達の世話をした後、母屋へ戻った。居間では母が清彦用の朝食にラップをかけていた。母は最近になってこの薄いビニールのシートを使い始めた。祥子はこの文明の利器をやたらと気に入って、すぐに何にでもかけようとするのでよく母にたしなめられている。

「あら、おはよう」

母は清彦の姿を目に留めると、弾むような声で言った。

「おはよう、祥子は？」

「もう学校。今日もバレエ部の朝練だった」

「毎朝よく続くなあ」

祥子は日紡貝塚の女子バレエボールチームに憧れていて、毎日バレエの練習に明け暮れているのだ。清彦は台所へ行くと、コップに水を入れて飲んだ。

「お父さんは今日は朝から仙台。農協の集まりで」

「そう」

清彦はできるだけ無感動に相槌を打った。

「ゆで卵？それとも目玉焼き？」

母が冷蔵庫から卵を取り出して訊いた。

「ああ、いいよ。自分でやるから」

清彦は立ち上がった。

「あらそう。じゃあよろしくね。お母さん、これから厩舎に行くから」

「厩舎に？」

「そうよ。古川に乗馬クラブを開業する人が、下見に来るのよ。馬を何頭か買いたいんだ  
つて」

「へえ、そうなんだ。俺も行くのか？」

「いいわよ。厩務員の増村さんと金井さんも一緒だから。どちらかと言えば私の方が付き添いみたいなのよね」

母は早口でそう言うと、割烹着姿のまま玄関へ向かった。清彦も見送りに行った。

「清彦」

母は靴を履きながら、鋭い口調で言った。

「あんた、あまりお父さんのこと責めちゃだめよ。今、うちが厳しい状態なの、あんたも知ってるでしょう。お父さんだって、好きで牛を貸し付けに出すわけじゃないんだから。チエルシーのことがあるから、感情的になるのは分かるけど」

清彦はわざと返事をせずに、足元の玄関マットを凝視していた。母はそれを見てため息をついた。

「そんな顔しないの。まあ、今回の馬の件がうまくいけば少しは状況も良くなるだろうし」  
そう言って、母は清彦の肩をぼんぼんと叩くと、いそいそと出て行った。樂觀的で羨ましい、とは到底言えない。宮瀬家の空気は、母の明るさで随分救われている。清彦はドアの鍵を閉めた。

清彦はゆで卵とトースト、ほうれん草の炒め物、そして牛乳という簡単な朝食を取ると、自室に戻った。家はしんとしていた。時々牧場の方から、牛の鳴き声が聞こえてくる。それに混じって、トラックの通る音、従業員の話し声も聞こえてくる。清彦は敷きっぱなしの布団に横になり、そっと目を閉じた。

状況が良くなる？ 本当にそうだろうか。こんな風に、細々と牛乳と卵の生産、肉牛の繁殖、乗用馬の生産・育成を続けていくだけじゃ、いずれはまた同じような壁にぶち当たるだろう。零細化していくのも時間の問題だ。一つでいい、何か一つでいいから、宮瀬牧場ならではの「売り」があれば……。

「宮瀬さん。郵便ですよー！ 宮瀬さん」

清彦は玄関からの大声で目を覚ました。いつの間にか二度寝をしてしまっていたのだ。壁時計に目を遣ると、既に十二時を回っていた。寝すぎてしまった。清彦は大声で「はい！ 」と返事をして、目をこすりながら慌てて階下へ降り、郵便を受け取った。一通は書留だったので、印鑑を押した。母方の祖母からだった。これは今開けない方がいい。後で母に渡しておこう。

もう一通の宛名の字体を見るなり、清彦は胸がどくと鳴った。見覚えのある、神経質なほどにかしこまった字体。淡い紫色の封筒を裏返した。一際胸が高鳴った。やはり、と思った。

綾子からの手紙だった。

清彦は、午後の大教室での授業を受けながら、ずっと上の空だった。

綾子の手紙は、素直に嬉しかった。遠い京都の地で、夢だった織物職人を目指して綾子が悩みながらも一生懸命頑張っている様子が窺えたからだ。清彦は頬杖をついたまま、目蓋を閉じた。目蓋の裏に、綾子の姿を思い描いてみる。細く長い指で、糸を絡め取りながら、一本一本丁寧に織り込んでいく。白い肌に汗をにじませた、真剣な横顔。きつと紺色

かえんじ色の地味なブラウスを着て、化粧っ気も殆ど無く、お下げにした長い髪を時々思い出したかのように手で撫で付けるのだ。彼女の目の前にある斜めに縞が入った綾織りの布は、よく見るとまだ幾分織り目が粗く、まだほんの数センチしか出来ていない。けれど、その繊細な柔らかい生地は、きつと誰より綾子に似合うのだ。自分の弱さを認めながら、何かを守りたいと言う彼女に。

「お祭り、一緒に行ってくださいませんか」

清彦は頭の中で手紙の最後の一文を再生して、顔が熱くなった。はやる胸を抑えながら、いいに決まってるじゃないか、今更水臭いな、と目蓋の裏の綾子に呼びかけるように胸の中で呟いた。

綾子と七夕祭りに行くのは、初めてではなかった。と言うか、小学生のうちには毎年、清彦と綾子と、それから祥子と綾子の弟たちの五人で行っていた。清彦にとっては、祭りというのは漠然と「お隣のアヤちゃんと呼くもの」であったのだ。その頃、清彦と綾子はお互いに純粋な幼馴染であり、相手を異性として意識したことなど殆ど無かった。綾子は自分の浴衣を可愛くない、と嫌がっていた。どうして周りの子みたいに、桃色や山吹色じゃないんだろう、どうして紫陽花や向日葵の模様が入っていないんだろう、とお祭りの季節が来る度に唇を尖らせていた。けれど、清彦は言葉にこそしなかったが、綾子には綾子自身の浴衣が一番似合っているように思えた。紺色と黒の市松模様……このシンプルで端正なデザインが、彼女の奥ゆかしさを一層引き立てていた。あの時、「似合ってるよ」と言うてあげればよかったのかもしれない。

だが、結局言う機会には恵まれなかった。中学一年の時、同じ学校のクラスメイトに祭りで一緒にいるところを目撃され、翌日異常なほどに冷やかされたのだ。登校したら、教室の黒板に相傘が書かれているわ、美空ひばりの「お祭りマンボ」の替え歌でわっしょいわっしょい、と囃し立てられるわで、全く散々だった。最悪だったのは、その冷やかしに耐え切れず、とうとう綾子が教室で泣き出してしまったことだ。清彦は綾子を可哀想だと思ったが、慰めの声を掛けねばますます冷やかされるのは必至で、ただ唇を噛んで気にしない振りをして、なおも冷やかし続けるクラスメイトに「しずねごだ！ おだつてんじやねえ！」（訳注 うるさいです。調子に乗らないでください。）と吐き捨てるのが精一杯だった。結局、騒ぎは先生の登場で収まったのだが、それ以来清彦は綾子と一緒に何かをしたり、どこかへ行ったりすることを避けるようになった。そして皮肉にも、そのことで初めて、清彦は綾子を異性として意識するようになったのだ。それまで何とも思わなかった綾子の一挙手一投足に、心を動かされるようになった。綾子の一言一言が、重みを持つようになった。

「私は清ちゃんが自分の意志で選択したことなら、その結果がどんな風になろうと構いません」

俺は結局牧場経営者の道を歩もうとしている。今だって、受けている講義は「農業経営学入門演習」だ。この道は、自分で選んだ道ではない。それは断言できる。選ばざるをえ

なかった道にすぎない。けれど、今、俺は苦難に陥っている牧場を何とかしたいと思っ  
ている。これって、経営者の考えることそのものだ。ということは、俺は経営者への道を自  
らの意思で選び取ろうとしているのだろうか。

「これからの農業経営……多様化と自由な発想」

清彦は黒板の文字を板書する。これは正しいと思う。もし、本気で宮瀬牧場を建て直し  
たかったら、宮瀬牧場を他の牧場と差異化するようなセールスポイントが必要だ。それは  
分かっている。でも、具体的に何をすればいいのかで行き詰まってしまふ。自由な発想が、  
まだ足りない。

「私は清ちゃん家の牧場が本当に好きだから」

綾子は清彦たちと七夕祭りに行ったり一緒に遊んだりしなくなっても、時々牧場へと顔  
を出した。母親のお使いで来る時もあったが、大抵は自分が来たたくて来ていたように思う。  
そうして、牛を撫でたり、手から餌を与えたり、乳搾りを手伝ったり、子馬と遊んだり、  
ひよこを触ったりしていた。清彦にとっては、それらの多くは毎日の義務だったから何が  
楽しいのかさっぱり理解できなかったけれど、綾子は本当に楽しそうに動物と触れ合っ  
ていた。清ちゃん家の牛乳が一番美味しい、やっぱり新鮮さが違う、と目を輝かせて言っ  
ていた。

清彦はペンを動かしていた手を止めた。

……そうか。なんだ、そんなことだったのか。

頭にかかっていた霧が一気に晴れた。絶対にこれでいけるとまでは断言できない。けれ  
ど、もしかしたら。もしかしたら、道が開けるかもしれない。とりあえず、今回のレポー  
ト課題だけでもどうにかなりそうだ。清彦は配られた藁半紙のプリントを見ながら、不敵  
な笑みを浮かべた。

「課題……自分が農場経営者であると仮定して、その農場をどのように発展させていくか、  
経営戦略を一五〇〇字程度で述べなさい。提出期限 七月七日」

先刻より降り出した雨が強くなった。梅雨時の雨はまっすぐだ。ぼつぼつ降り始めたかと思うと、あつと言う間に路地をぬらし、植え込みの木の緑が濃いものへと変わっていく。雨の匂いと木々の青い匂いが一緒になって、小さく開けた窓から入ってきた。

「間に合ったんやな、運のいいこって」

「ええ、お豆腐がぬれないよう、走ったんですから」

「綾ちゃんは足が速いな。せやけど、豆腐ははじめからぬれとるやん。水の中に入っとるんやから」

「あ、そうでした」

「もう、綾ちゃんはぼけとるんか、しっかりしとるんか分からんなあ。けど、瞬発力はピカイチやな」

香奈は雑誌をめくる手を止めて、笑った。

「豆腐屋さんのラップを聞いて、あわてて飛び出したんですけど、私、うっかり鍋を忘れちゃって。それで、おかみさんに持ってきていただいて、必死に追いかけたんです。清水商店さんのところでやつと追いつきました」

綾子は照れ隠しのように、前髪の雨粒を指先で触る。

「豆腐屋さんから手桶を受け取ったら、鼻にポツつと冷たいものが落ちたんです」

「そいで、ぬれんよう急いで走って帰ったわけやな」

「はい」

「この雨に間に合ったんやからやっぱり、運がええなあ」

「そうですか……?」

「そうや。あの逃げ足の速い豆腐屋のおっちゃんを呼び止められたんやし、雨にも間に合った。これを運がいいと言わんで、どうするんや」

香奈はそう言うと、おかきのかけらを口に放りこんだ。

「それに……」

言いかけて、意味ありげな笑みを浮かべた。香奈がこの顔をする時は、決まって綾子からかう時なのだ。

「もう、何ですか」

綾子はわざとふくれっ面をして目をそらした。

「さつき、いいものが届いたから、綾ちゃんはますます運がええなあ」

「え? いいものって」

恥ずかしいので、わざと誤魔化してみる。でも、香奈にはお見通しなのだろう。

「はよ、開けてみたらどない?」

「いえ、あとにします。まとめノートの今日の分がもう少しで終わりますから」

「えらいなあ、綾ちゃん。ほな、邪魔やと思うし、ちよつと出てくるわ」

香奈は財布を手にしち上がった。障子を閉める時に、またにやにやしているのを綾子は見逃さなかった。

土曜日は工房も、学校や会社の例に漏れず半ドンだ。昼食の後片付けを終えると、綾子にも自由な時間が与えられる。初めの一、二週間はこの空いた時間を何に費やしたらいいのか検討がつかず、川沿いを散歩したり昼寝を試みたりした。しかし、香奈がこの時間を織物の勉強に充てているのを知ると、綾子も、織り方の名前、その特徴、色名などその週に自分が知ったことを工房近くの文具店で買ってきたノートにまとめるのが習慣になっていた。そして、そのノートは綾子が熱を出した日以降、平日の夜のちよつとした細切れの時間にも開かれ、記されるようになっていたのだ。

落ち込むわけにはいかない。少しでも前に進まなければ。夜ごとノートを開くたびに、綾子は自分に言い聞かせる。そして、いまだ来ない清彦からの返事のことを思った。今日こそは来るだろうと思っていたのに、その予想は外れ、布団の中でも手紙のことを考える。そうしている間にいつのまにか眠ってしまい、朝になる。今日こそはと、夕方届くだろう手紙のことを思いながら、織機に向かう。

来ない返事に悶々としながら、夕方の配達を楽しみに織機の前に立つ日々。不思議と、以前のように失敗をすることが少なくなっていた。清彦からの返事が来ないから、頑張れるのだろうか。夕方の配達がそんなに励みになっているのだろうか。

もし、手紙の返事が来てしまったら、元通りになってしまうのではないか。そんな妙な心配をし始めた今日、返事が来た。

香奈から封筒を渡され、土曜日の郵便配達はないものだと思い込んでいた綾子は驚いた。土曜日は昼前に配達があるのだという。香奈にからかわれ、開けるのをためらっていると豆腐屋のラッパの音が鳴った。良子に頼まれていたので、急いで豆腐屋を追いかけた。

そして、綾子の前の文机の上には清彦からの手紙がある。白い封筒に、ちよつと右上がりの清彦の字で自分の名前が書かれている。香奈はやはり、気を遣ってくれたのだろう。からかわれると恥ずかしいが、姉のように思っている香奈の心遣いがうれしかった。

綾子さんへ

前略、お手紙ありがとうございました。仙台は先日入梅したばかりで、毎日雨が降り続いています。たまに止んだかと思うと、薄暗い梅雨空でチェルシーはご機嫌斜めです。

風邪はもう大丈夫ですか。知恵熱を出すほど、職人の世界は厳しいものですね。見様見真似で覚えるなんて、大学受験時代、教科書と参考書で暗記ばかりしていた自分には、とても想像がつきません。でも、職人の世界へ自ら飛び込んで行ったやる気あふれる君だから、いつかきつとできるようになるはずだと僕は信じています。君が女性だからというわけではありませんが、それでもやはり遠い街の職人の世界へ飛び込むなんて、僕にはで

きないことです。素晴らしいことだと思います。どうか、頑張ってください。

大学生活は思いのほか自由です。しかし、熱心に研究している学生が多く、自分も早く研究テーマを見つけないかと思っています。岩手出身の友人ができたのですが、彼は毎日学食でカレーばかり食べている変な男です。

七夕祭りに誘ってくれて、ありがとう。僕もできれば綾子さんに会いたいと思っています。牧場のことで話したいことがあるのです。君のおかげで、活路が見えてきました。詳しくはその時、話します。

梅雨時は冷えるので、ご自愛ください。

草々

清彦の通う大学名が入った便箋に二枚。清彦らしくない、かしまった文体で書かれてあった。「僕」というのは変だ。清彦は綾子の前ではいつも、「俺」だった。それに、「綾子さん」だなんて、面と向かってそう呼ばれたことはなかった。なんだか、気障でよそいきの手紙だなあとと思う。

しかし、その文面から希望に燃えた大学生のはつらつとしたものを感じた。女々しい自分には便箋に確か、五、六枚も書いたが清彦の手紙は簡潔だった。最後のほうは、駆け足で書かれていたが、その短い文の中にたくさんのことが読めた。まず、清彦も自分に会いたいと思ってくれたこと。故郷を出た三月以来、会っていない幼馴染の顔を綾子は思い浮かべた。大学生になった清彦はどんなふうになっているのだろうか。思い切ったことを書いてしまったと後悔していたが、会いたいという返事がとてもうれしかった。そして、綾子に牧場のことで何か話したいことがあるということ。牧場に何か、あったのだろうか。よくないことだろうか。それから、清彦の言う、「活路」。これは見当がつかなかった。

とにかく、七夕祭りで会いたいと清彦も言ってくれたことが今の綾子には何より幸せなことだった。だが、今の綾子には盆や正月でもない八月の上旬に開催される仙台の七夕祭りに行くなど、到底無理なことだった。だいたい、入ったばかりの一年目の職人見習いが盆休みをもらえるかどうかも分からないのだ。それにこの前、熱を出して休みを一日もらったばかりだ。

昼過ぎから降り始めた雨は夜になってもまだ降り続けている。雨音は綾子の絶望的な気分をさらにかき立てた。

夕食の片付けを一通り終え、そろそろ銭湯にでも行くかという時間になったころ、綾子は親方に呼ばれた。普段入ることのない親方の居室の机には、着物や帯の図案がきれいに並べられている。先日の熱のことがあったので、親方と話をするのはどこか気まずい。うつむきがちに、親方の爪を見ていた。熟練の織り職人は、長く伸ばした爪の先にヤスリ

を当て、のこぎりのような刻みを入れている。横糸を織り終わるたびにその都度、指先で横糸を掻き寄せる。その時に、この爪の刻みを利用して糸を引っ張るのだ。爪掻本綴織と呼ばれる、西陣織の中でも最も難しいものを織るためのその爪は、綾子にとって憧れだった。長年の経験によって培われた確かな技術と、研ぎ澄まされた指先の感覚で、キャンパスいっばいに絵を描いていく。糸の一本一本が織りなす繊細で、立体感のある模様。この親方の織ったものは特に模様が細かいと評判だった。

親方は還暦に手が届きそうな年齢だったが、がっしりしたその体格と、まだまだ黒いその髪から綾子ほもつと若く思っていた。だから、香奈から親方の年齢を聞かされて、驚いたものだった。

「あんたに出張に行ってもらおかと思っつてな」

ふいに親方は、湯飲みを手にもう言った。

「出張？」

予想外の言葉に思わず大きな声を出してしまった。

「いや、出張というより研修やな」

「はあ……」

親方は、何かチラシのようなものを取り出しながら続ける。

「来月、仙台である展示会に行つて欲しいんや」

ほらこれや、と渡されたそのチラシには、「西陣織展示会 杜乃百貨店」と大きな字で書いてあり、開催日は八月八日とあった。おぼろげな記憶をたどると、確かこの日は仙台の七夕祭りの日だ。

「前の日の七日に夜行に乗つたら、次の八日の昼に仙台に着く。その足で、展示会を見てこい。ええか、しつかり見てきいよ。そや、あんた、実家は仙台やったな。そのままゆつくり二泊して、十日の朝、急行に乗ればええ」

一週間早い盆休みや、と親方は付け加えた。

思いがけない親方の言葉に、ただただ礼を何度も言い、綾子は辞去した。階段を上りながら、思う。きつと、これは里心がついて熱を出してしまった情けない自分への気遣いなのだ。てつきり叱られるかと思つていたのに。入門わずか三月あまりの弟子には、考えられないほどありがたく、もつたいない話だった。

このありがたい「研修」に感謝しつつ、綾子は床に就いた。それからの日々、時が経つのが早かった。まとめノートのおかげか、織りにも精が出るようになったし、いくつか新しい織り方も覚えた。不安と苦痛ばかりだった織り機の前にいる時間は充実したものへと変わっていた。

そして今、綾子は急行「瀬戸」に乗っている。夜の車窓からはほとんど何も見えない。時折、遠くに街の明かりがわずかに見えるだけだ。窓には自分の姿が映っている。高校を出た頃と少しも変わらないように思う。でも、やりたいことだけは見つかった。そう思う。

この急行列車に乗って、二時間あまり経過した頃だろうか。客室は寝静まり、列車がレールの上を走る音だけが聞こえている。綾子は目を閉じた。

二週間後、レポートが返却された。清彦はこわごととそれを受け取った。教授の眼鏡の奥の瞳が意味深に光った気がした。評価を見て、驚いた。そこには赤いペンで「秀」と書かれていた。この授業で秀をもらったのは今回が初めてだ。更にそこには、講評も走り書きされていた。

「大変面白く読ませてもらいました。農場の観光化というアイデアは極めて独創的です。特に、農場内に工場を作り、乳製品の生産から加工販売までを一律で行うというのは画期的だと思います。また、ロッジを建てて、訪れた人々をもてなす、というのにも心が惹かれました。実現するにあたって、敷地や設備など、主に経費の面での問題が多いとは思いますが、それを差し引いても非常に興味深いレポートでした。」

清彦は心が震えた。自分の考えた計画は、決して荒唐無稽なものではなかったのだ。少なくとも、大学教授という専門家の最たる人物に評価してもらうことができた。清彦は、背中に羽根が生えたような気分だった。まだ具体的に何かに取り掛かったわけでもないのに、このまま何でも出来そうな気がした。

「何だべ、そんなニヤニヤして。気持ちの悪い奴だ」

気付けば、雄一がげげんな目で清彦を見つめていた。

「いいよいいよ、何とでも言ってくれ。今日の俺は寛大だから。何せ、秀をもらったから」

清彦はそう言ってフンと笑った。

「秀だと！ 清彦、お前、そんな見え透いた嘘は吐くもんじゃねえぞ」

雄一は清彦のレポート用紙をぶん取るうとしたが、清彦はひらりとかわし、逆に机の上に無防備に放置されていた雄一のレポートを取り上げた。

「ええと、どれどれ。加藤雄一君の評価は……可！ よかったなあ、不可じゃなくて。それより、お前、下の行全然埋まってないだろ。もっと書けよ」

「わい！ この野郎、読むでねえ！」

顔を真っ赤にしながら、取り返そうとブンブン両腕を振る雄一の様子は、小熊が暴れているみたいで滑稽だった。二人のやり取りを見ていた学生の間から、クスクスと笑い声が漏れた。

その夜、清彦はちゃぶ台を挟んで父と向き合っていた。本当に希望を通したい時に、食事の席で話をしては駄目だということ、清彦は経験で学んでいた。ちゃぶ台の上では母が淹れたお茶が湯気を立てていた。父は甚平姿で片手に団扇というゆるんだ格好だったが、表情は険しく、額には深い皺が刻まれていた。

「父さん、俺、牧場を継ぐよ」

開口一番、清彦はにこやかに言った。しかし、父の表情は眉一つ、口元一つ動かない。

それもそのはずだ。清彦が農学部に進学した時点で、牧場を継ぐというのは決定事項も同然だったのだから。父は返事をしなかった。

「けれど、条件がある」

清彦は毅然とした声で言った。さっきまでの微笑みはもう消えていた。

「チェルシーを売らないでほしい。父さんは、チェルシーを潰すつもりなんだろう」

父の眉がびくりと動いた。清彦は畳み掛けるように続けた。

「分かっているんだ。俺だって、うちが厳しい状態だっていうのは。借金があることだって知ってるよ。けれど、やっぱりどうしてもチェルシーを手放すのは嫌なんだ。だって、俺にとってあいつは家族も同然だから」

「私もそうよ」

清彦の後ろでアイスクャンデーをなめていた祥子が合いの手を入れた。父はじろりと祥子を見た。祥子はたじたとなって視線を落とした。母は台所で食器を洗っていた。背中を向けながらも、話し合いの行方に耳を傾けていた。

「父さん、牛を売って借金の返済に充てるつもりなんだろう。けれど、そんなこといつまでも続けられないよ。どんどん先細っていくだけだ。子供の分際で、生意気なことを言うてごめん。でも、俺にいい案がある。怒らないで聞いてほしい。それは……宮瀬牧場を、観光化するんだ」

父の眉間に皺が寄った。清彦は反論を挟む余地を与えずに、言葉が続けた。

「最初は、何か一つでいいから、特徴的な乳製品を作るんだ。離れの台所を改装してね。ヨーグルトとか、チーズとか、アイスクリームとか……何でもいい。一つでいいから、『売り』を作り出す。そしてそれを売っていく。売り続けるうちに、宮瀬といったらコレ、という風に世間に定着するはずだ。そうしたら、その収益を拡大再生産に充てる。これを繰り返す。いずれは工場を作る。そこで、今度は二種類、三種類と商品を増やしていく。要するに、宮瀬というブランドを作るんだ」

清彦の口調はどんどん熱を帯びていった。

「それから、牧場の一部を観光客用に開放して、牛の乳搾り体験や、馬やポニーの試乗もできるようにする。そうすれば、週末に家族連れが来るようになる。幸い、ここは仙台からそう遠くない。収益が上がったら、牧場の一角にロッジを建ててもいい。そこでうちでとれた牛乳や肉、卵を使った料理でお客さんをもてなすんだ。そうすれば、もっと遠いところからお客さんが来るようになる。宮瀬の名が、全国に広がるようになるよ。小岩井農場よりも知名度を上げることだって夢じゃない」

「お兄ちゃん、すごい！」

祥子は興奮して大声を出した。清彦はほんの少し得意そうな顔で祥子の方を見たが、またすぐに真剣な顔に戻った。

「馬鹿げたアイデアと思うかもしれない。けれど、父さん。日本は今ものすごい勢いで成長しているよ。工業だけじゃなくて、農業だって変わっていかなくちゃいけないん

だ。大切なものを守っていくためにもね。だから、お願いだ。俺、全力を尽くすから。チエルシーは売らないでくれ」

清彦は床に手をつけて頭を下げた。背中に冷や汗が流れるのを感じた。いつの間にか、台所の水道の音が止まっていた。母も神妙な顔をして、父の後ろに控えていた。父は長いこと押し黙っていたが、冷めた茶を一気に喉に流し込むと、湯のみをゴトンと置き、重い口を開いた。

「だめだ、そんな馬鹿げたことは」

清彦は、無念さでギョツと目を閉じた。しかし、父の言葉には続きがあった。

「だが、牛は売らんよ。チエルシーはもちろん、どの牛だって売らん。貸すだけだって言っただろう」

清彦は顔を上げた。父の表情からはさっきの堅さは消えていた。

「……でも、結局は売らんじゃないの？ だって、繁殖用貸し付けなんだろう？」

「違う」

父は妙な顔をして、大きくため息をついた。

「……金成の方に、一面荒れ果ててほぼ手付かずの土地がある。そこに自動車の教習所を作りたいたいという人がいるんだが、草刈に随分手を焼いているらしい。そういうわけで、農協を通して、うちの牛を一ヶ月の間貸すことになったんだ。こっちは餌代が浮いて貸し付け料が入る。向こうは人件費が浮いて草刈ができる。なに、変なものを食べて泡を吹いたりしないように、あらかじめ下見に行ったが、問題は無さそうだよ。元々あの一帯は痩せた土壌だからな。それに、こっちからも桑島と小野寺を世話係として同行させるから心配要らん」

桑島というのは、もう十年も勤めているベテランの従業員、そして小野寺というのは美咲のことだった。

「じゃあ、売るっていうのは……」

「そんなこと、一言も言っとらんぞ。誰だ、そんなことを言ったのは」

父は無然として家族を見回した。母も祥子も首を横に振った。

「そら、お前の思い込みだろう」

安堵と情けなさが津波のように清彦を飲み込んだ。全身の力が抜けて、その場にへたり込んだ。ここ三週間ばかり悶々としていたのは、悩み損だったというわけか。しかし、どうもおかしい。確かに「売る」という単語を父の口から聞いたはずなのだが……気のせいとはとても思えない。まったく、親父つてのは、頑固なくせに案外勝手なものだ。しかし、清彦はもう父を責める気にはならなかった。

「よかったじゃない、お兄ちゃん。ほら、アイスでも食べれば」

祥子は清彦の肩を小突いてホームランバーを差し出した。清彦は力なくそれを受け取った。包装紙をはがして一口かじる。バナナの味が体中に染み渡るようだ。

「そうそう、よかったと言えば、例の馬の話。ハナコとワカコが売れたのよ。それもこっ

ちの言い値で。あの子達、無事に貰い手がついて本当によかったわあ」

「うちも本格的にサラブレッド生産に乗り出すか。清彦の言うように、これからは農家にも『売り』が無いとな」

父はそう言ってニヤリと笑った。さつきは清彦の発案を「馬鹿げたこと」と一蹴したが、実を言うと嬉しかったのだ。それまで嫌々この道を歩んでいると思っていた清彦が、気付けば自主的に経営について考えるようになっていた。牧場経営者としての自覚が、確かに萌芽している。真剣に語る清彦の瞳の中に、若き日の自身の情熱を垣間見たようだった。

それから一週間後、清彦の元へ綾子から手紙が届いた。親方の好意で、無事に来月の八日から十日にかけて里帰りすることができる、とのことだった。清彦はにわかに胸が高鳴った。あと十日もすれば、綾子に会える。しかし、七夕祭りのことについて特にふれられていないのが気がかりだった。ひよっとしたら七夕祭りに一緒に行くことを楽しみにしているのは自分だけなのではないか、と。しかし、そんなことを考えていても仕方が無い。今はとにかく、綾子の最初の手紙の言葉を信じるのだ。

八月八日の朝。綾子は陽光の眩しきで目が覚めた。太陽はもう昇っていて、日よけと窓の隙間からも日光が差し込んでいた。時計を見ると、もう六時半を回っていた。いけない、あと十五分で東京に着く。夜行列車でこんなに熟睡できるなんて、相当疲れが溜まっているのかもしれない。髪に手をやると、夜中座席に当てられていたため、三つ編みがかかなり崩れている。綾子はゴムを一度外し、再び丁寧に髪を結び直した。日よけを上げて、窓の外を見た。見渡す限りに建物が連なっている。そして、その向こうにはよきと生えた三角形の塔は……東京タワーだ。綾子は思わず息を飲んだ。朝陽を受けて輝くオレンジ色の東京タワーは、とてつもなく綺麗だった。「東京に行きたい」と口癖のように言っていた清彦に、見せてあげたい。綾子は強く思った。

東京駅で「瀬戸」を降り、構内の売店であんパンを買った。まだ早朝だというのに、驚くほど沢山の人がいた。自分のような旅行者もいるが、多いのはサラリーマンだ。夏なのに、あんな鼠色の長袖のスーツを着込んで大変そうだ。清ちゃんもあんなスーツを着て、こんなに人が多い東京で働きたかったのかしら……。綾子は人ごみをすり抜けて、山手線に乗り換えた。上野まで行って、今度は急行「みやぎの」に乗る。そうすれば、あとは仙台まで一本だ。

東京・上野間はたった四駅しかないの、あつという間に上野に着いた。まだ次の発車までに少し時間がある。綾子はホームのベンチに腰掛けて、水筒のお茶を飲み、あんパンを食べた。幾重にもなったホームに、電車が頻繁に行き交っている。その先に、こんもりとした森が見える。あれが有名な上野公園だと思ったら、森の向こうには動物園があるはずだ。綾子は早々に食べ終わると、ホームを行ったり来たりしたり、びよんびよんと飛び跳

ねたりしたが、やがて電車が来たので、とうとうそれらしきものを見つけることはできなかった。

「みやぎの」に乗って一時間もしないうちに、再び眠気が綾子を襲った。東京の空気に少し興奮してしまったからかもしれない。まあ、いいか。仙台までは五時間以上もある。綾子はもう一度目を閉じた。

次に目を覚ましたのは、十二時を過ぎた頃だった。窓の外を見ると、一面が田園地帯だった。向こうには、平野を見守るように大きな山脈が延々と聳え立っている。雲ひとつ無い青空に、くつきりと稜線が描かれている。綾子はそれを見て、すぐに分かった。仙台平野と、奥羽山脈。ここは、私の生まれ育った場所だ。故郷と呼べる領域に足を踏み入れたことを悟った瞬間、涙がじわりとこみ上げてきた。京都での四ヶ月の生活とのコントラストが鮮やかで、懐かしさが胸に迫った。頑張つてよかった、くじけないでよかった。綾子はそんな言葉を胸の中で何度も呟いていた。

仙台駅のホームに着いて、綾子は「四ヶ月ぶりでもあまり変わっていない」と思った。大通り、商店街、店の看板、路面電車。何もかもが自分がかつて馴染んでいたままの姿だった。ただ一つ違うのは、今日が七夕祭であるということだ。ホームからでも、溢れんばかりに飾られている煌びやかな七夕飾りと、人ごみでごった返している大通りが見える。綾子と同じ電車に乗っていた客の中にも、七夕祭り目当ての観光客がたくさんいるようだった。改札を通ると、思わず、観光客と共にお祭りの方へとふらふら行ってしまいそうになったが、綾子は気を確かに持って、人ごみをかきわけるようにして、杜乃百貨店へと歩みを進めた。

西陣織展示会は、杜乃百貨店の五階の催事場で開かれている。綾子は着いたばかりの足で杜乃百貨店に行った。ここには子供の頃、よく家族で来たものだった。エレベーターガールの制服までもが懐かしい。エレベーターを降り、受付で西陣連合組合の名前を告げた。入場料が無料になるというのは本当だった。七夕祭りの方に人が集中しているためか、展示会は思ったよりもずっと閑散としていた。客は綾子以外に四、五人いるだけだ。

足を踏み入れると、色とりどりの着物の数々が目に飛び込んできた。

「わあ……！」

綾子は思わず小さく声を漏らした。ゆっくりと足を進めて行った。真っ先に目を惹いたのは、水色が滲んでいるような帯だった。綾子は近付いて、食い入るように眺めた。淡い水色を基調としながらも、緻密に銀色の糸が織り込まれているところは薄氷の張った湖面を思わせる。色の濃淡が絶妙で、織り目をまるで感じさせないほどなめらかな帯だ。まるで平面に水彩画を描いているみたいだ。綾子は、一流の織り職人の作品を見る度にそう思う。けれど、よくよく目を凝らしてみると、ここはハツリ織り、ここはボカシ織り……昔ただ着物に憧れていただけの時分には絶対に分からなかった工程が、うっすらと頭に浮かぶのだった。綾子は鞆からまともノートを取り出し、その帯の作者の名前と、織り方の特

徴を書き付けた。そしてまた、その帯に限らず、他の作品についても同様に、思いつく限りのことを断片的に次々とメモをしていった。いつかは私も、こういう展示会に自分の着物を出すんだ。綾子は一つ書き付ける毎に、その思いを強くしていった。

時間が過ぎるのはあつという間だった。時計を見ると、既に三時を回っていた。夢中で見ているうちに、二時間も経ってしまっていた。綾子は慌ててデパートを後にし、七夕祭りの盛況から背を向けるようにして、市電の改札を通った。

高校時代は毎日電車通学をしていたから、仙台から家までの行き方は慣れたものだった。きつと今でも、始終考え事をしていたって、家に辿り着くことができるだろう。移動を続けているために足取りこそ弱々しくなってきたてはいるものの、不思議と気持ちは強く持ったままだった。いや、むしろ一層強くなっていると云っていい。考えるのは、ひたすら織りのことだった。職人達の華麗な作品の数々。あの次元にまで達するには、今の自分では到底無理だ。まるで足りないことだらけだ。技術はもちろん、気概、精神力、体力、美的センス。もつともつと勉強しなくちゃ。もつともつと腕を磨かなきゃ。もつともつと強くならなくちゃ。もつともつと……。

何度、頭の中で「もつともつ」と繰り返したことだろう。いつの間にか、綾子は実家の最寄り駅である泉駅に到着していた。本当に、上の空のまま辿り着いてしまった。やっぱり自分はどこかふわふわしたところがあるらしい。こういうところも、いけない。綾子のはため息をつくど、駅員に切符を渡して、うつむいたまま改札を通った。

二三歩足を踏み出して、ふと、見覚えのある黒いズックが視界に入った。綾子は目を見開き、そろそろと視線を上げた。

そこには、清彦がいた。

行き交う人の中、ひよろつと立っていた。水色のポロシャツを着て、ジーンズを履いて、髪は最後に会った時より短くなっていたけれど、あのいつもと変わらない優しい眼差しで、真っ直ぐに綾子のことを見ていた。そこだけ、光が射しているみたいだった。

「おかえり」

清彦はそう言っ、目を細めた。ただでさえ柔らかい目元が、笑うとさらに甘くなった。

「……どうして？」

綾子の口からかすれた声が漏れた。清彦は気恥ずかしそうに頭を掻いた。

「八日に帰ってくる、って手紙くれただろ。……だから、迎えに来た」

「いつから待ってたの？ うそ、やだ、私、ちゃんと云ってなかったから……あ、そっか、お祭り一緒に行こうって自分から誘ったのに、私ってば……」

綾子は咄嗟のことに頭が回らず、口の中で呟くように言葉を並べ立てた。鼓動がどんとん速まっっていく。

「綾子」

おろおろする綾子を制止するように、清彦は綾子の両肩に手をかけた。触れた瞬間、そ

の華奢な感触に、手が熱くなった。

「そんなことはいいんだ。俺、暇だから、待つなんて全然どうってことないんだ。それより、ちゃんと言ってよ。俺もおかえりって言ったんだから。帰ってきたんだろ？」

綾子は初めてまともに清彦の目を見た。心臓が締め付けられるように縮んだ。唇をきゅっと結んだまま、綾子はこくりとうなずいた。

「ただいま」

言った瞬間、今まで我慢してきたものが堰を切ったように溢れてきた。口元が歪んだ。後はもう止まらなかった。殆どしゃくりあげるようにして、綾子は涙をこぼした。清彦は困ったような笑顔を浮かべ、綾子の肩をあやすように叩いた。

「なんだよ、泣くなよ。これじゃ、俺が泣かしてるみたいだ」

清彦は後ろのポケットからハンカチを取り出して、綾子に差し出した。ハンカチを持ち歩いてる、しかもきちんとアイロンがかかったのを。そんなところまで変わってなくて、嬉しいのに綾子はますます泣けてきた。

「だって……」

ずびー、という音が構内に響きわたる。

「ああっ！ お前、鼻かんだな、今！」

「ごめんなさい〜」

ずびー。

「……もういいよ。それ、やる」

清彦はため息をついた。でも内心は呆れているのではなく、ほっとしていた。綾子は、変わってない。

「ううん、ちゃんと洗濯して返すもん」

綾子は赤い目をこすると、涙声のまま語り出した。

「……今日ね、来る時、東京タワーが見えたの。それがすっごく綺麗で……清ちゃんに見せたいな、って思ったの。それから、仕事で杜乃百貨店の西陣展示会に寄って……ここに  
ある作品に比べたら私なんてまだまだだな、って思って……自分に足りないことを挙げたらキリが無くて……思い返してみれば、私、ずっと変わってないの。仕事を始めたばかりの時から、ずっと同じこと考えてるの。足りないものばかり、もっと強くならなきゃ、もっと腕を磨かなきゃって、ずっと、一人で。そしたら、急に、目の前に、清ちゃんがいたから……」

綾子の声は嗚咽に変わった。ハンカチを顔に押し当てたまま、またしばらく泣いた。

「そっか」

清彦は綾子の言葉も姿も、全てをそのまま受け止めた。今はもう、自分達を遮るものは何も無い。

「清ちゃん」

綾子は顔を上げ、清彦を真っ直ぐ見つめた。

「会いたかった」

「俺もだよ」

清彦は眩しそうに笑った。

「さ、とりあえず荷物置きに帰ろうか、早くしないと花火に間に合わなくなっちゃう」  
そうやって、清彦は綾子が足元に置いていた大きな黒い手提げ鞆を持ち上げた。

「あつ、ねえ、牛舎が空っぽ！」

バス停からの帰り道、牧草地の脇の砂利道を歩いていると、綾子が大きな声を上げて指を指した。清彦は歩みを止めて、その方向を見た。傾きかけた陽の光に照らされて、牧草地は輝いていた。その広大な平野の片隅で、一番手前の牛舎だけががらんとしていた。

「ああ、あそこの牛、今全部貸し付けてるんだ」

「チェルシーも？」

綾子は振り返って訊いた。

「うん」

「残念だなあ。せっかく帰ってきたのに、チェルシーに会えないなんて」

綾子は無念そうに首を大きく横に振った。

「でも、草刈に出してただけだから、すぐに戻ってくる。大丈夫、また会えるよ」

そして、清彦はまた歩き出した。綾子はその背中を追った。家までの一本道で、何組かの祭りへ行く人々とすれ違った。子供たちだけの集団だったり、恋人らしき男女だったり、おばあちゃんから孫までの大家族だったりした。誰もが皆、高揚感に満ちた笑顔を湛えていた。からんころんという下駄の音が、夕映えの忍び寄る青空に響いていた。

「へえ、おばあちゃんが昔、京都に行ってたなんて全然知らなかったよ」

「おや、お母さんから聞いてなかったのかい」

「ぜんぜん」

時計の針は三時五十五分をさしている。

「京都ってものすごく遠いんでしょ。あさみ、行ったことないけど」

「宮城からは遠いね。なにせ、北と西だもの。でも、昔はもつと遠かったね」

「どのくらい？」

あさみは、かりんとうをポリポリかじりながら聞いた。かりんとうは綾子の家に行くと決まって出される定番のおやつだ。家では食べたことのないお菓子だが、すぐに気に入った。

「東京までの夜行と、東京から仙台までの急行を合わせて十五時間くらいだったかしら」

「ええり、そんなに？」

「そうよ、大変な長旅だよ」

「お尻、痛くない？」

「そりゃあ、痛いよ」

麦茶のおかわりを入れながら綾子は笑う。思えば、孫とこんなふうに関係が長く話したことは今までなかったような気がする。利発な子で、こちらの話をよく理解してくれるからつい、難しいことまで話してしまった。

「それで、どうして宮城に戻ってきたの？ 職人さんだったんでしょ」

「ふふふ、あさちゃんは鋭いね」

それに、年の割りにしっかりした子だ、と綾子は思った。先程の笹の話といい、大人びている。

「おばあちゃんね、伝統的な織物ではなくって、新しい織物を始めてみたくなったんだよ」

「新しいって？」

「たとえば、そこにあるタペストリー」

そう言って、あさみの後ろにあるタペストリーを指差す。淡い水色のグラデーシヨンの中に、星のような模様が織り込まれている。黄色や薄いグリーンの色は光の加減で光沢が現れた。

「これはね、伝統的な織り方ではほとんど織ってはいらなけど、デザインや使う糸は洋風なのさ」

「すごいきれいだね。これ、糸がきらきら光ってる」

「そうなんだよ、今回初めて光る糸をどこどこ使ってみたんだよ。それでね、おばあちゃん、京都では伝統的な織物を織っていたんだけど、暇をみつけては自分の考えた織物を織っていたんだよ。こっそりとね。でもある日、親方に見つかってしまってたね」

「怒られたの？」

「それが怒られるかと思ったのに、親方はおばあちゃんの織った織物をじいっと見てね、しばらく黙っていらっしやっただけど、展示会に出しなさいっておっしゃっただよ。伝統的な織物じゃないから、こんなのは出してはいけないし、何より親方の恥になりますからって言って断っただけど。でも、親方がどうしてもっておっしゃるから、出させてもらったんだよ」

「へえ、おばあちゃん、すごいね。どんな織物だったの？」

「ひまわりの織物だよ。大きなひまわりをこう、いくつも散らして……」

綾子はぼんぼんとひまわりの花を置くように、手を動かした。

「それでね、そのおばあちゃんの織物がね、賞をいただいたんだよ。技巧特別賞という賞をね……」

「ええー、すごい」

「賞をいただいてから、おばあちゃんに個人的に注文が入るようになってね。そりゃあ、うれしかったよ。それからは昼間は伝統的な織物を織って、空き時間は注文をいただいた織物を織っていたんだよ。でも、親方に申し訳なくってね……」

「どうして？ 注文が入ったんなら、親方も喜んでくれるんじゃないの？」

あさみは首をかしげた。

「もちろん、親方はとても喜んでくださったよ。でも、注文をいただいているのは伝統的な京都の織物じゃなくて、おばあちゃんが勝手にデザインした創作織物だからね。実際の親方からは非難されたこともあったんだよ。やっぱり、室町時代から続いている西陣織の職人の世界を汚しているからね」

「おばあちゃんの織物はあんなにきれいなのにさ、認めてくれないなんてひどいね」

あさみは職人の世界は変だと思った。きれいなものを作ることができるなら、それでいいではないか。

「伝統的な昔ながらの世界だからね。仕方ないんだよ」

綾子は目尻を下げ、苦笑した。

「それで、どうなったの？」

「おばあちゃん、悩んだんだけど京都を離れて独立することにしたの。ちょうどその頃、おじいちゃんから、一緒になろうって言うってもらってね。踏ん切りがついたのよ」

「へえ」

「そのことをお話したら、親方もおかみさんも喜んでくださったね。親方は、向こうじゃ見つからないだろうからって、織り機を手配してくださったし。工房じゅうの職人さんたちが集まって、おばあちゃんのために送別会を開いてくださって、京都をあとにしたのよ」

「香奈さんも喜んでくれた？」

「そりゃあもう。あの人、手紙が来るのを見ては、いつもおばあちゃんをからかっていたからね。喜び方も尋常じゃなかったよ」

ふふふ、と綾子は目を細める。

「織物教室はいつ始めたの？」

「たしかまだ、お母さんが小学生だった頃だから、二十年も前だよ」

ああ、もうそんなになるんだねえと、綾子はつぶやいた。

「香奈さんは今はどうしてるの？」

「今も現役で織っていらっしやるよ。京都の女性織物職人の中で、最年長のベテランさんだよ」

「へえ、そうなんだ」

あさみは不思議な気がした。綾子から聞いた話の中で生きている人が今も現実に生きていて、存在している。ずっと遠い昔の話のように思っていたけれど、そんなに昔のことではないのかもしれない。過去と今とは確かにつながっている。それが分かったような気がした。

そういえば、とつぶやいて綾子が立ち上がる。隣の部屋のたんすの上から二段目の引き出しを開けて、何かを探している。しばらくすると戻ってきた。

「あったあった。これ、香奈さんの写真よ」

差し出された写真の中には、織物をバックに綾子と背の高い白髪の女性が写っていた。

「へえ、この人が香奈さんかあ。なんかしゃきっとした人だね」

祖母の綾子よりも年上だから、おばあちゃんと言ってもいい年齢だろう。だけど、凛とした雰囲気のおばあちゃんだ、とあさみは感じた。

「これは、去年、京都の展示会で会った時の写真なんだよ」

「へえ、今もおばあちゃん、京都に行くんだね」

「そりゃ、行くよ。やつぱりあそこは、おばあちゃんの織物の原点だからね」

そう言うと、綾子はにっこりと微笑んだ。おばあちゃんって笑うと女の子みたいだ、とあさみは思った。

玄関のほうで音がした。

「おじいちゃんかな」

トントんと廊下を歩く足音が近づいてくる。

「やれやれ、今日は小学校が三校も見学に来て大変だったよ」

そう言って部屋に入ってきた清彦は、ポロシャツにズボンといういでたちだ。ポロシャツには、宮瀬牧場と書かれたロゴが入っている。

「こんにちは」

「あれ、あさみじゃないか。いらっしやい。今日はどうしたんだい」

清彦は急に笑顔になり、あさみを見て、それから綾子のほうに向いた。

「ご苦労様です。あさちゃんはね、うちの笹をもらいたくてわざわざ来てくれたのよ」

「ほう、笹を。それはまたなぜなんだい」

あさみは恥ずかしくてうつむいてしまった。綾子には言えたが、祖父の清彦には笑われるのではないかと思ったのだ。

「ふふふ、あさちゃんは真剣なのよ」

綾子が助け舟を出し、説明する。

「そうか、あさみはませてるなあ」

清彦はうんうん頷きながら笑う。

「よし、おじいちゃんに任せろ。立派な笹をあげるよ」

ついておいで、と手招きしながら清彦は廊下に出た。あさみもそれに続く。やっと手に入るんだ、と思いながら廊下をずんずん進んだ。

この家の裏には砂利が敷き詰められたちよつとした日本庭園があった。庭園と呼ぶには小さいものだが、石灯籠や池がある。砂利が敷き詰められた壁側の一角に笹が植えてあった。大人の背丈くらいの笹である。

清彦の手には、物置きから取ってきたのこぎりが握られている。

「危ないから、どいてるんだよ」

清彦は中ほどの部分を持って、いっきに引いた。細い笹はすぐに切られ、それはたちまち七夕の笹に変身した。

「わーい、おじいちゃん、ありがとう。これがほしかったんだ」

うれしくて、あさみは笹をわざと振ったり、その葉をさわったりしてみた。笹を揺らしたびに、シャラシャラと音がしてとても気持ちがいい。

「よかったな。こんなに喜んでくれるんなら、また来年も取りにおいで」

「うん」

念願の笹を入手して、あさみは有頂天だった。

「ところで、おじいちゃん」

「うん、なんだね」

あさみは気になっていたことを聞いてみようと思った。

「チエルシーって、おじいちゃんの子どもの頃からいたんだね」

「おばあちゃんから聞いたの。チエルシーはおじいちゃんの恋人だって」

のこぎりを片づけていた清彦が破顔した。ははは、と笑う。あさみが今まで見たことのない顔だ。のどの奥が見えそうなくらい、大きく口を開けて笑っている。

「おばあさんは恥ずかしいことを言うなあ」

照れているのか清彦はまだ笑っている。

「残念ながら、いくら牛が長生きでもそれはないよ。今のチェルシーは初代チェルシーの孫、つまり三代目なんだ」

「孫？　じゃあ、あさみとおんなじだね」

牧場でもの牛の中でもひときわ大きくて、おいしい牛乳をくれるあのチェルシーが三代目だったなんて、あさみは知らなかった。優しい目をしたチェルシー。

あさみはいい事を思いついた。

「ねえ、おじいちゃん。あさみ、牧場に行きたい」

「え？　今からかい？」

「うん、今から行きたい」

「だって、もう夕方なんだよ。早く帰らないと、お母さんが心配するだろう」

「え、大丈夫だよ。まだ明るいし。チェルシーにあいさつ、するんだ。同じ三代目同士、これからもよろしくねって」

清彦は迷った。もうすぐ四時半になるうとしている。かわいい孫の願いを聞いてやりたいが、家路が遅くなってはいけない。しかし、夏至を少し過ぎた太陽はまだ一向に沈む気配を見せていない。

「じゃあ、お母さんに電話して、許しをもらったら連れて行ってあげよう」

清彦がそう言い終わるか終わらないかのうちに、あさみはポケットから携帯電話を取り出し、一番をプッシュして家にかけた。最近の子どもはすごいな、とつぶやきながら清彦はそれを見守る。

「お母さん、いいよって」

陽子はしぶしぶ認めてくれた。清彦に電話を代わり、「ああ」とか「うん」とか「おう」という返事の後、帰りは笹もあるからと結局、清彦が車で送ることになった。牧場からそのまま帰るので、あさみは綾子に礼を言って出た。また来るからね、と付け足すのも忘れない。

あさみは上機嫌だった。清彦の牧場、宮瀬牧場は車で二十分の山あいの開けたところにある。山奥と呼ぶにはちょっと不似合いで、動物たちの鳴き声が緑あふれる牧草地に響く楽しいところだ。夕方になっていたが牧場にはたくさんのお客がいた。

しばらく自由に行っていていいと清彦に言われたあさみは駆け出した。

「チェルシー！　」

チェルシーはの牛舎は一番手前の赤い屋根のそれだ。ンモくと鳴いて、あさみのほうを見る。こげ茶の毛は固いけれどなめらかなで、さわると気持ちがいい。チェルシーの体温が

伝わってくる。

「ひさしぶりだね」

あさみはチェルシーに話しかけながらなでてやる。優しい目は、元気だった？ と語りかけているような気がした。

「あのねチェルシー、あさみたち、似た者同士だったんだよ。三代目だったの。初代はね、おじいちゃんの恋人だったんだよ。あなたはその孫。分かる？」

チェルシーは分かっているのか分かっていないのか、ただ草を食んでいるだけだ。しっぽでエをバチンバチンと追い払っている。あさみはそのまましばらく見ていた。

それからポニーのマリーのところにも行った。たくさんの人が順番を待っていたので、あさみは声をかけることができなかったが、それでも心の中であいさつした。マリーちゃん、元気？ またくるね、そう言うのと遠くにいるマリーがこちらを向いたような気がした。

鶏舎のニワトリにはまたヒヨコが生まれたらしく、あちこちでピピピという鳴き声が聞こえている。

「さ、そろそろ帰ろうかね」

清彦がビニール袋を手に戻ってきた。

「え、もう少ししたい」

「明日も学校だろう。遅くなったらいけないから、帰ろう」

「え、やだあ」

まだ会っていない動物がたくさんいるのだ。あいさつをしなければ、とあさみは思った。

「ほら、これ、おみやげだよ」

「ありがとう。なあに？」

袋の中を見ると、飲むヨーグルトのボトルがたくさん入っている。

「来月発売する新製品なんだよ。新発売のオレンジ味とピーチ味が入ってるぞ」

見ると、宮瀬牧場のロゴマークの入ったオレンジ色とピンク色のボトルが何本も並んでいた。あさみがいつも飲んでいいるプレーン味もある。

「ほんとだ、これまだジャパコで見たことないよ。すごい」

あみやげをもらい、それにお腹もすいてきたので、あさみはここは大人しく帰ることにした。今日はめいっばい楽しい思いをしたのだ。もう十分だ。

帰りの車の中であさみは清彦に尋ねる。例の缶は後部座席に横にして置いてある。あさみの膝には、飲むヨーグルトの入った袋がある。ボトルの冷たさが袋を通して伝わってくる。

「ねえ、おじいちゃん」

「ん？ なんだい」

車の中はクーラーが利いていて、とても快適だ。助手席の窓から見える会社帰りのサラ

リーマンや高校生たちは汗をふいたり、手団扇で顔を仰ぎながら歩いている。蒸し暑くて汗ぐっしょりなんだろうな、とあさみは思った。でも、車の中は涼しい。水族館の魚はこういう気分なんだろう。

「おじいちゃんの若い頃も、八月の七夕祭りはあったの？」

「ああ、あったよ」

仙台の七夕祭りは毎年、八月上旬に開催される。七月七日の七夕と区別するため、この街の人々は「七夕祭り」とか、「八月の七夕祭り」と呼んでいる。

「ふうん、やっぱり昔からあったんだ。どんなのだったの？」

「そうだなあ、吹流しやくす玉なんかの飾りは今ほど豪華ではなかったけど、それでも綺麗だったよ。屋台もたくさんあってね……」

「どんな屋台？」

「リヤカーの屋台で、串に三つ刺した、たこ焼きを売っていたなあ。ひとつ十円でね」

「十円！　すごく安いね」

「はは、そりゃ昔と今じゃ、物価が違うからね」

当時の十円は今だと百円くらいかなあ、と清彦は付け加えた。

「それからどんなのがあった？」

「ヒヨコやウズラのヒナが十円で売っていたよ。金魚すくいは確か、一回五円でできたな。

りんご飴は十円だったよ」

「すごいすごい。いいな、いいなあ」

あさみは目を輝かせていた。そんなに安かったら、自分のお小遣いで、たこ焼きもりんご飴もどつさり買うことができる。

「いいな、おじいちゃんの時代に行ってみたいな。そうしたら、金魚すくいだっていっぱい、できるのに。いいな、行きたいな」

「そうだな、おじいちゃんも戻ってみたいな。もう一度、あの時代に」

清彦はハンドルを握りしめ、前を向いたままつぶやいた。

「別に、昔がいいってわけじゃないんだけど、あの時の七夕祭りは最高にきれいだった」

清彦は四十年以上も前の七夕祭りのあの夜について、話し始めた。

夕食を終えたあさみは、「ごきる丸」を見た後、自分の部屋に行った。学習机もマットもカーテンもピンクの色調で統一された部屋だ。あさみがすべて選び、小学校に上がる前の春に両親が買ってくれたものだ。訪問した友達が必ずと言っていいほど、うらやましがるとこの部屋をあさみはとても気に入っていたし、少し自慢に思っていた。そして今、窓際の壁にはもらってきたばかりの笹がある。扇風機の風でわずかにゆれて、今にもサラサラシヤラシヤラと音を立てそうだ。

今日はいろんなことがあったな、とあさみは思った。おじいちゃんとおばあちゃんも昔

は若かったのだ。当たり前なのだけど、すごい発見だと思う。二人はあんな素敵なお恋をしていたのだ。それに、二人とも夢を持っていて、それを追いかけてついには実現したのだ。夢を叶えるとは、なんて素晴らしいことなんだろうか。あさみが毎月読んでいた少女マンガ雑誌「はっぴー」には、アイドルやプロのスポーツ選手を目指すマンガがいくつも連載されていたが、二人の現実のほうがマンガよりもすごいことのように思えた。同じように、「はっぴー」には片思いでドキドキしたり、遠距離恋愛でつながった少女と少年のマンガも載っていたが、これも二人の恋にくらべたら大したことのないように思えた。

そうか、二人は昭和の織姫と彦星だったのだ。本物の織姫と彦星なのだから、マンガのお話が敵うわけがない。あさみは、若い頃の二人の顔を想像してみたりした。祖母は今もかわいらしい感じの人だから、若い頃はもったかわいかったのだろう。祖父だって、日焼けしているけれど、高い鼻ときりっとした眉は昔はさぞ、イケメンだったはずだ。そんな二人があさみの祖父と祖母なのだ。あさみは誇らしく思った。目を閉じ、今日二人から聞いた、昭和の七夕物語を思い出してみる。

七夕は来週だったけれど、願い事を書くことにした。あさみは、引き出しから油性マジックを取り出す。学校の短冊にはこんなこと、書けないけれど。せっかく自分専用の笹が手に入ったのだ。このチャンスを利用してはならない。

絶対、叶ってほしいから本気の願い事。色紙で作った短冊に、あさみは大きな字で迷わず書き入れた。

『あさみだけの彦星が現れますように』

清彦は座布団に正座して、風鈴の鳴る音を聞いていた。綾子の家は清彦の家より狭いが、風通しがいい。ましてや今日は浴衣を着ているから尚更だ。それにしても普段滅多に着ないものを着ると、どうも所作がぎこちなくなってしまう。清彦は涼しい風が首筋に当たるのを感じながら、視線を泳がせた。懐かしい。ところどころ傷の付いた、四角いちやぶ台。中央がくびれた青い花瓶には、いつも季節の花が挿してある。今日は花のかわりに、笹の葉が生けてある。飾り棚には、写真立てが三つ。前に来た時よりも一つ増えている。最後に来たのはいつのことだっけ。

「清彦君、ごめんなさいね。お待たせしちゃって」

綾子の母親が、いそそと麦茶を盆に載せてやって来た。

「いえ、いいんです」

清彦はグラスを受け取ると、軽く頭を下げた。隣には綾子の二歳下の弟、隆が座っている。隆はかりんとうをぼりぼりやりながら、グラスを受け取った。

「お母さくん！ 帯締めるの手伝って！」

廊下の向こうから綾子の声が聞こえた。綾子の母はすぐさま甲高い声で返した。

「んもう、あんたは清彦君が来てるっていうのに、恥ずかしくないの！ ……ちよつとごめんなさいね」

綾子の母は気まずそうな笑顔を浮かべると、盆を床に置いて立ち上がり、綾子の部屋へと向かった。廊下をパタパタ歩く足音が遠ざかり、綾子の部屋のふすまが開く音がした。

「雅は？」

清彦は末っ子の弟のことを尋ねた。

「昼から祭りに出かけてるよ」

隆は麦茶を一口飲んで言った。声変わりした頃から、隆はこんな風にボソボソとした話し方をするようになった。

「隆は？ 祭り、行かないの？」

「行くよ。五時半に友達と駅で待ち合わせしてる」

清彦は時計を見た。四時半を少し過ぎたところだった。

「清ちゃん、姉ちゃんと結婚すんの？」

「え！？」

あまりに突拍子も無い問いに、清彦は危うく麦茶を吹き出しそうになった。それをどうにか飲み込んで隆の方を見たが、隆はいたって平然としていた。

「だって、お付き合ひ、してるんでしょ？」

「いや……、まだ、そういうのじゃないし」

「まだ？」

隆はちろりと視線を向けた。清彦は一瞬で顔が赤くなった。墓穴だ。思わずうつむいて

しまう。

「姉ちゃんのこと、頼むね」

隆はボソリと言った。清彦は思わず顔を上げた。

「……うん」

ずいぶん経って、清彦はうなずいた。

さつきより一人分多い足音が近付いて、ふすまが開いた。綾子の母が入ってきた。

「さあさ、お待たせしました。あら、綾子、何恥ずかしがってんの」

促されて、綾子がそろそろとふすまを開けて入ってきた。清彦は目を見張った。

浅葱色の生地に、紫陽花の模様が白く染め抜かれた浴衣。帯は、山吹色と抹茶色の市松模様。べっこうの帯留めが付けられている。髪は綺麗に結い上げられていて、淡い桃色のビー玉のようなガラスの飾りが付いたかんざしが見える。

浴衣を着た綾子を見るのは何年ぶりだろう。清彦は息を飲んでしばらくの間見とれていった。綾子の頬はほんのり紅潮していた。そしていたたまれなくなったのか、おずおずと一回転して見せた。帯は上品な文庫結びにされていた。襟から覗くうなじは眩しいくらいに白い。

「……どう？」

清彦が口を半開きにしたまま黙っていたので、たまらず綾子は上ずった声で訊いた。清彦は我に返った。

「似合ってるよ」

迷わず、清彦は言った。綾子はますます頬を赤くしたが、目と口元は素直に緩んだ。

「ありがとう。この帯、親方が私のために織ってくれたものなの。仙台に出發する前日に、急に手渡されて……私、あんまり嬉しくて泣いちゃった」

「まあ、そうだったの。」

綾子の母親は口元に手を当てて、驚いたように言った。道理で、と清彦は納得した。その控えめながらも不思議と目を引く色合いは、正真正銘綾子にあつらえられたものだったのだ。

「それから、この浴衣は、工房の先輩の香奈さんがくれたの。『そんな若い色、うちはもう着られへん』って。香奈さんだってまだまだ若いのに……面白い人なんだ、ちやきちやきしてて。京都の人なのに、江戸っ子みたいで」

語る綾子の顔は楽しそうに輝いていた。

「いい人達で、よかったな」

清彦は目を細めた。

清彦と綾子はバスと市電を乗り継ぎ、祭りへと向かった。二人が仙台駅に到着した時、時刻はちょうど午後六時になろうとしていた。

夕陽の空に、赤、青、黄色、桃色、色とりどりのくす玉がぼっかりと浮き上がり、吹流しがたなびいている。吹流しの間からは、和紙で作られた投網や屑籠、巾着袋が見える。竹ひごに掛けられた紙衣が風にはためいている。数え切れないほどの折鶴の束がしゃらしやらと音を立てる。通りの両側から、笹の枝が腕を伸ばすように連なっている。そしてその枝の至るところに、短冊が吊るされていた。色鮮やかな短冊は、笹の葉に咲いた無数の花のようだ。

今夜は、七夕祭りを締めくくる最後の夜だ。遠くからも人々がつめかけていて、進むのにも苦勞するほど、町は人でごった返っていた。四方どちらへ向かっても、人の波は途絶えそうになかった。通りには所狭しと出店が並んでいた。甲高い笑い声、呼び込みの怒鳴るような大声、子供の泣き声……声という声がかしこで弾けていた。町全体が、熱に浮かされていた。

「すごい人だな」

「うん。昼間よりも増えるかも」

「広瀬通に出よう。それから、定禅寺通りに抜けて、西公園まで行けばいい」

清彦は先導するように歩き出した。綾子は後ろをついて歩いた。が、人ごみをかき分けて歩いて行くと、色んな人と肩や腕がぶつかって、なかなかうまく進めない。清彦は何度も肩越しに綾子を振り返った。そして意識して歩幅を縮めたが、すぐにまた二人の間に誰かの肩や頭が入って、距離は開いてしまうのだった。

「ごめん、俺歩くの速いな」

清彦はついに立ち止まって言った。

「ううん、私、久しぶりに下駄を履いたから……」

綾子は恐縮したようにうつぶいした。二人は少しの間、雑踏の中で向かい合っていた。立ち止まっただけでも、人波はまるで二人を町の一部であるかのように自然と避けて行った。

清彦は首の後ろに手を当てて考え込んでいるような表情をしていたが、やがて思い切ったように顔を上げて、綾子の手を取った。綾子の心臓が跳ねた。

「はぐれないように」

清彦はつぶやくと、そのまま手を引いて歩き始めた。清彦は決して綾子の方を見なかった。頑なに前を向いていた。そのせいで、綾子の方からは清彦の真っ赤になった耳しか見えなかったが、それでも綾子は十分だった。

「あっ！ 清ちゃん見て！ りんご飴がある！」

綾子が清彦の手を引っ張って言うと、清彦はようやくこちらを向いた。まだ顔が赤い。清彦は照れを隠すかのように、わざと大げさに眉をしかめた。

「りんご飴？ あんな体に悪そうな色したの、よく食う気になるよなあ」

「毎日食べるわけじゃないでしょ。お祭りなんだからいいじゃない」

綾子は頬を膨らませた。

「分かったよ、じゃあ、買いに行こうか」

「あつ！ 向こうにはあんず飴もある！ たこ焼きも！ どうしよう、全部食べたい」  
「そんなに食ったら腹壊すぞ」

清彦は、もう自然に笑えるようになっていた。繫いだ手はまだ緊張で汗ばむけれど、きつともう少し時間が経てば、当たり前になるだろう。祭りの夜は長い。

二人は屋台を巡りながら、定禅寺通りへ出た。一際人だからのできている金魚すくいの出店を見つけた。最初に綾子が挑戦した。しかし、のんびり屋の綾子がのろのろとポイを水面に近づける時には、金魚達は察しよく逃げてしまい、結局一匹もとることができなかった。落ち込んでいる綾子を哀れんだ店のおじさんが、好意で一匹くれた。続いて挑戦した清彦は張り切って「十匹は取ってみせる」と豪語したくせに、一匹しかすくわないうちに紙が破れてしまった。地団駄を踏んで悔しがる清彦がいつになく子供っぽくて、綾子は声をあげて笑った。それぞれ一匹の金魚が入ったビニール袋を提げて、二人はまた歩き出した。

定禅寺通りを半分ほど行ったところに、一般客用の大きな笹が飾られているのを見つけた。観光客や、自宅に笹が無い人々が、ここで短冊に願い事を書いて吊るすのだ。

「ねえ、清ちゃん、家で短冊書いた？」

「いや、書いてないけど」

「じゃあ、今書こうよ」

「嫌だよ、そんな願い事を書くだなんて、子供っぽいこと」

「いいじゃない。今日は一年に一度の特別な日なのよ。書こう、書こう」

綾子と言うが早いのか、すぐに用意された机へと清彦の手を引っ張って行った。清彦は仕方ないな、とため息をついて、係のおばさんからペンと短冊を受け取った。二人はそれぞれ願い事を書いた。清彦の方が早く書き終わった。綾子を見ると、並々ならぬ丁寧さで、一字一字念を込めるかのようにゆっくりと書いていた。

「どれどれ、『いつか個展を開けるくらい織物がうまくなりますように』……ふうん、綾子らしいな」

「やだ！ 勝手に読まないでよー！」

綾子は慌てて両手で隠すが、もう遅い。清彦はニヤニヤと意地悪そうな微笑みを浮かべている。

「で、書けた？」

「うん、まあ、書けたけど……」

「俺も。……あ、もうあんまり吊るすところ無いなあ」

清彦は笹を見上げて頭を掻いた。

「最後の日の夜だからねえ」

「あ、あのへん空いてる。綾子、貸して」

清彦は、上の方で枝分かれしている辺りを指差して言った。かなり高くて、綾子が背伸びしても届きそうにない場所だった。綾子は言われるまま、自分の短冊を手渡した。清彦

は手を伸ばして笹を手元に近づけると、二つの短冊をそれぞれ糸で枝に結びつけた。

「これでよし、と」

清彦は満足そうな表情で短冊を見上げた。

「清ちゃん、短冊に何て書いたの？」

「無事に進級できますように」

「え、夢が無くない」

二人がまだ歩き出さないうちに、早くも花火が広瀬川の向こうで高く打ち上がった。祭りの最後を飾る花火だ。いつの間にかすっかり空が暗くなっていた。破裂するようにまばゆい閃光が弾けた。

綾子と清彦は広瀬川の土手に並んで座って、花火を見た。土手には、恋人達や、家族連れ、老夫婦……人々が寄り添って、同じように空を見上げていた。等間隔で打ち上がった。牧場を、継ごうかと思ってる」

「本当？」

綾子が言うと、清彦は静かにうなずいた。

「将来的には、宮瀬牧場を観光化しようと思うんだ。ロッジを建てて、宿泊施設を整えて、独自の商品を開発して……ヨーグルトとか、チーズとか。もちろん、まだ親父には反対されてるけれど、長い時間をかけて説得するつもりだよ。きつとうまくいく気がするんだ。そのためにも、とりあえずは、今自分が出来る精一杯のこと、大学での勉強を頑張ろうと思う」

清彦は真っ直ぐに綾子の目を見た。綾子はうなずいて、微笑んだ。

「私はね、親方のように、着る人のことを本当に考えた着物を作れるような職人になりたい」

綾子は自分の帯を愛しそうに撫でて言った。

「そしていつか……これは本当にいつになるか分からないけれど、いつか心の底から『これは自分にしか作れない作品だ』って言えるようなものを作れるようになったら、今日見た展示会のような立派な場所に、自分の作品を出せるようになりたい。自分の着物が、色んな人の目に触れて、知ってもらえるようになる……それって、すごく素敵なことだと思うから」

また花火が上がった。今までのとは違って、枝垂れのような花火だった、それを合図にして、清彦は確かな口調で言った。

「うん。綾子なら、出来るよ」

湧き上った光の穂は一面に広がって、やがて川面へと消えて行った。清彦は残像を慈しむかのように夜空を見やりながら、短冊に書いた本当の願い事を反芻していた。

『来年も、再来年も、その先もずっと、二人で七夕祭りに来られますように』

《丁》

あとがき

最後までお読みいただき、ありがとうございました。昭和の短冊物語、いかがでしたでしょうか。

奇数章担当のみかんです。

この小説は、ゆうきさんと交互に書いたリレー小説となっています。その誕生秘話を少しでもお話したいと思います。

きっかけは、ある小説指南本でした。その本には実践たくさんの課題があり、リレー小説もその一つだったので。二人とも同じ本を読んでいたのも、六月中旬のある日、私は思い切つてゆうきさんを誘ってみました。女子中学生が友達に、一緒にトイレに行こう、と誘うような気分でした。

断られるかな、と思ったのですが、ゆうきさんは快諾してくれました。それから、いくつかテーマの候補を挙げ、書く順番のくじとともに、ゆうきさんに引いてもらいました。

結果は、「七夕」と「最後」。つまり、私が最初に書くことになってしまったのでした。七夕というと、安直にも織姫と彦星がすぐに思い浮かび、「リアル織姫と彦星」という設定にしようと考えました。でも、携帯やインターネットなどのコミュニケーションツールが発達した現代ではこの設定は生かせないと思い、物語の舞台を昭和三十年代にしてみました。そして、一章の最後に清彦を少しだけ出して、ゆうきさんにバトンを渡しました。すると、ゆうきさんは、実家が牧場の清彦、という素晴らしい設定を考えてくれました。それからどんどん、バトンの受け渡しのたびに物語が回り出しました。ゆうきさんが次はどんな展開を書いてくれるのだろうか、と毎回とても楽しみでした。この小説で三作目という、超ヒヨッコの私をゆうきさんは毎章、巧みな筆致と展開で引っ張ってくれました。

ところで、小説を書き終えて推敲段階に入っていた日、世紀の天体ショー・皆既日食が見られました。綾子と清彦の若き日は実は、昭和三十八年と設定していたので、この年が前回の皆既日食の年と知り、この偶然の一致にわくわくしました！

そして、この小説の時代考証のためにいろいろ調べていくうちに、私は昭和三十年代が大好きになっていました。あさみと同じように、行ってみたいと思うようになっていたのです。戦争の傷から少しずつ立ち直って、明るい未来を目指して、人間も社会全体も前を向いてどんどん進んでいた、高度経済成長の時代。もちろん、良いことばかりではなく、その影には公害や労働災害など悲惨なこともたくさんあったと想像します。でも、そこには、人々の温かさ、優しさ、まごころ、純粹さ、ほがらかな笑いといった古きよき日本の姿があったのでしょうか。

そんな雰囲気を感じていただけたら、幸いです。

二〇〇九年七月二十五日

みかん

あとがき

小説に限らず、音楽でも何でもそうだと思いますが、共同作業というものは、信頼に足る相手としかできないものだと思います。それは、腹のうちをどこまでも読み合える、という意味ではなく、自分の方からは決して見えない相手の領域を、それがどの程度の広さ・深さの領域であれ、その領域の存在を全肯定できる、という意味です。

私は普段、知らなくて見えない領域を持つ他人は怖いので、そこへボールを投げたりはしません。黙ってボールをいじくりながら通り過ぎます。(何せ根暗なもので……)

けれど、「この人なら」と思える相手には、とにかく自分の持ち球を全て使って投げてみます。直球でも変化球でも、速球でも遅球でも、あらゆる選択肢を使って、何とか相手に届かせようと思えます。

けれど、ボールは、時には届かない時もあります。ワンバウンドしてどうにか届く時もあるれば、逸球される時だってあるし、暴投だってありうる。(もちろん、逸球なのか暴投なのか判断に困るような状況も……)

私が思うに、「信頼」というのは相手が必ずボールを受け止めてくれる、ということではないんです。相手がたとえボールを受け止めてくれなかったとしても、またはボールが相手まで届かなかったとしても、再び次の投球動作に入っていける。そういうことだと思えます。

私にとって、みかんちゃんはそのような相手です。彼女のような素敵な「未知の領域」を持つている相手と競作が出来た私は、とても幸せ者です。

とは言え、終始楽しいことばかりだったわけではありません。続きが思いつかなくて頭をかきむしることもあれば、早く書いてみかんちゃんに渡さなきゃいけないのにどうしても書く気になれずに憂鬱になったりもしたし、自分の全く知らない「昭和三十年代の日本」という世界を想像力とわずかな資料のみを頼りに構築するという難業に耐え切れず筆を折りたくなった時もありました。

それでも、こうして完成させることが出来たのは、彼女が私のことを信頼して待っていてくれたからだし、私も彼女を信頼して走り続けることができたからです。(何だか「走れメロス」みたいだな……笑)

綻びや粗も多々あるとは思いますが、精一杯頑張ったことだけは間違いありません。この競作を通じて、私はまた「信頼する」ということの大切さを身をもって学びました。抱えきれないくらい、大きな収穫です。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

二〇〇九年七月二十六日

音速ラインを聴きながら

ゆうき